



# Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 配備計画ガイド



Sun Microsystems, Inc.  
4150 Network Circle  
Santa Clara, CA 95054  
U.S.A.

Part No: 820-7435-10

Sun Microsystems, Inc. (以下米国 Sun Microsystems 社とします) は、本書に記述されている製品に含まれる技術に関連する知的財産権を所有します。特に、この知的財産権はひとつかそれ以上の米国における特許、あるいは米国およびその他の国において申請中の特許を含んでいることがありますが、それらに限定されるものではありません。

U.S. Government Rights – Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

この配布には、第三者によって開発された素材を含んでいることがあります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

un、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、docs.sun.com、Java および Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標、登録商標もしくは、サービスマークです。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

OPEN LOOK および Sun<sup>TM</sup> Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK のグラフィカル・ユーザインタフェースを実装するか、またはその他の方法で米国 Sun Microsystems 社との書面によるライセンス契約を遵守する、米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

本書で言及されている製品や含まれている情報は、米国輸出規制法で規制されるものであり、その他の国の輸出入に関する法律の対象となることがあります。核、ミサイル、化学あるいは生物兵器、原子力の海洋輸送手段への使用は、直接および間接を問わず厳しく禁止されています。米国が禁輸の対象としている国や、限定はされませんが、取引禁止顧客や特別指定国民のリストを含む米国輸出排除リストで指定されているものへの輸出および再輸出は厳しく禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

# 目次

---

はじめに .....	13
<b>1 製品概念 .....</b>	<b>19</b>
Java EE プラットフォームの概要 .....	19
Java EE アプリケーション .....	19
コンテナ .....	20
Java EE サービス .....	20
Web サービス .....	20
クライアントアクセス .....	21
外部システムとリソース .....	22
Application Server のコンポーネント .....	23
サーバーインスタンス .....	23
管理ドメイン .....	23
クラスタ .....	25
ノードエージェント .....	25
名前付き設定 .....	26
HTTP ロードバランサプラグイン .....	27
セッション持続性 .....	27
クラスタ内の IIOP 負荷分散 .....	29
Message Queue と JMS リソース .....	29
高可用性データベース .....	30
概要 .....	30
システム要件 .....	31
HADB のアーキテクチャー .....	31
二重障害の防止 .....	35
HADB 管理システム .....	35
セットアップと設定のロードマップ .....	38
▼ 高可用性のために Application Server をセットアップおよび設定するには .....	38

<b>2</b>	<b>配備の計画</b> .....	39
	パフォーマンス目標の確立 .....	39
	スループットの見積もり .....	40
	Application Server インスタンスへの負荷の見積もり .....	41
	HADB への負荷の見積もり .....	44
	ネットワーク構成の計画 .....	46
	帯域幅の要件の見積もり .....	47
	必要な帯域幅の計算 .....	47
	ピーク負荷の見積もり .....	48
	サブネットの設定 .....	48
	ネットワークカードの選択 .....	49
	HADB のためのネットワーク設定 .....	49
	可用性のための計画 .....	49
	可用性の規模の適正化 .....	50
	可用性を向上させるためのクラスタの使用 .....	50
	システムへの冗長性の追加 .....	50
	設計上の決定 .....	52
	ピーク負荷または通常状態負荷のための設計 .....	52
	システムのサイジング .....	52
	Message Queue ブローカの配備の計画 .....	55
	マルチブローカクラスタ .....	56
	Message Queue ブローカを使用するための Application Server の設定 .....	57
	配備シナリオの例 .....	60
<b>3</b>	<b>トポロジの選択</b> .....	63
	共通の要件 .....	63
	基本要件 .....	64
	HADB ノードとマシン .....	64
	ロードバランサの設定 .....	65
	共存トポロジ .....	65
	構成例 .....	66
	共存トポロジのバリエーション .....	67
	分離層トポロジ .....	69
	構成例 .....	69
	分離層トポロジのバリエーション .....	71

---

使用するトポロジの決定 .....	73
トポロジの比較 .....	73
<b>4 配備のためのチェックリスト .....</b>	<b>75</b>
配備のためのチェックリスト .....	75
索引 .....	81



# 図目次

---

図 3-1	共存トポロジの例 .....	66
図 3-2	共存トポロジのバリエーション .....	68
図 3-3	分離層トポロジの例 .....	70
図 3-4	分離層トポロジのバリエーション .....	72



# 表目次

---

表 2-1	持続性の頻度オプションの比較 .....	44
表 2-2	持続性の範囲オプションの比較 .....	45
表 2-3	xMバイトのセッションサイズのための HADB ストレージ領域の要件 .....	55
表 3-1	トポロジの比較 .....	74
表 4-1	チェックリスト .....	75



# 例目次

---

例 2-1	応答時間の計算 .....	42
例 2-2	1秒あたりの要求数の計算 .....	43
例 2-3	必要な帯域幅の計算 .....	47
例 2-4	ピーク負荷の計算 .....	48



# はじめに

---

『配備計画ガイド』では、本番配備を構築する方法について説明します。

ここでは、Sun GlassFish™ Enterprise Server のドキュメントセット全体に関する情報と表記規則について説明しています。

## Enterprise Server のドキュメントセット

Enterprise Server ドキュメントの URL (Uniform Resource Locator)

は、<http://docs.sun.com/coll/1343.8> です。Enterprise Server への導入としては、次の表に示されている順序でマニュアルを参照してください。

表 P-1 Enterprise Server のドキュメントセットの内容

マニュアル名	説明
『Documentation Center』	タスクや主題ごとに整理された Enterprise Server のドキュメントのトピック。
『リリースノート』	ソフトウェアとドキュメントに関する最新情報。サポートされているハードウェア、オペレーティングシステム、Java™ Development Kit (JDK™)、およびデータベースドライバの包括的な表ベースの概要を含みます。
『クイックスタートガイド』	Enterprise Server 製品の使用を開始するための手順。
『Installation Guide』	ソフトウェアとそのコンポーネントのインストール。
『アプリケーション配備ガイド』	アプリケーションおよびアプリケーションコンポーネントの Enterprise Server への配備。配備記述子に関する情報を含みます。
『開発者ガイド』	Enterprise Server 上で動作することを目的とし、Java EE コンポーネントおよび API のオープン Java スタンダードモデルに準拠した、Java Platform, Enterprise Edition (Java EE プラットフォーム) アプリケーションの作成と実装。開発者ツール、セキュリティ、デバッグ、ライフサイクルモジュールの作成に関する情報を含みます。
Java EE 5 Tutorial	Java EE 5 プラットフォームテクノロジーと API を使用した Java EE アプリケーションの開発。

表 P-1 Enterprise Server のドキュメントセットの内容 (続き)

マニュアル名	説明
『Java WSIT Tutorial』	Web サービス相互運用性テクノロジー (WSIT) を使用した Web アプリケーションの開発。WSIT テクノロジーを使用する方法、時期、および理由と、各テクノロジーがサポートする機能およびオプションについて説明します。
『管理ガイド』	設定、監視、セキュリティー、資源管理、および Web サービス管理を含む Enterprise Server のシステム管理。
『高可用性 (HA) 管理ガイド』	クラスタの設定、ノードエージェントの使用、およびロードバランサの使用。
『Administration Reference』	Enterprise Server 設定ファイル <code>domain.xml</code> の編集。
『パフォーマンスチューニングガイド』	パフォーマンスを向上させるための Enterprise Server の調整。
『Reference Manual』	Enterprise Server で使用できるユーティリティーコマンド。マニュアルページのスタイルで記述されています。 <code>asadmin</code> コマンド行インタフェースも含まれます。

## 関連ドキュメント

その他のスタンドアロンの Sun GlassFish サーバー製品については、次のドキュメントを参照してください。

- [メッセージキュー documentation \(http://docs.sun.com/coll/1343.4\)](http://docs.sun.com/coll/1343.4)
- [Identity Server documentation \(http://docs.sun.com/app/docs/prod/ident.mgmt#hic\)](http://docs.sun.com/app/docs/prod/ident.mgmt#hic)
- [Directory Server documentation \(http://docs.sun.com/coll/1224.1\)](http://docs.sun.com/coll/1224.1)
- [Web サーバー documentation \(http://docs.sun.com/coll/1308.3\)](http://docs.sun.com/coll/1308.3)

Enterprise Server とともに提供されるパッケージの Javadoc™ ツールリファレンスの場所は <http://glassfish.dev.java.net/nonav/javaee5/api/index.html> です。さらに、次のリソースが役立つことがあります。

- [Java EE 5 Specifications \(http://java.sun.com/javaee/5/javatech.html\)](http://java.sun.com/javaee/5/javatech.html)
- [Java EE Blueprints \(http://java.sun.com/reference/blueprints/index.html\)](http://java.sun.com/reference/blueprints/index.html)

NetBeans™ 統合開発環境 (IDE) でのエンタープライズアプリケーション開発については、<http://www.netbeans.org/kb/55/index.html> を参照してください。

Enterprise Server に含まれる Java DB データベースの詳細は、<http://developers.sun.com/javadb/> を参照してください。

GlassFish Samples プロジェクトは、さまざまな Java EE テクノロジーの使用法の例を示すサンプルアプリケーションの集合です。GlassFish Samples は Java EE Software Development Kit (SDK) に付属しています。また、<https://glassfish-samples.dev.java.net/> の GlassFish Samples プロジェクトページからも入手できます。

## デフォルトのパスおよびファイル名

次の表は、このマニュアルで使用されているデフォルトのパス名とファイル名について説明したものです。

表P-2 デフォルトのパスおよびファイル名

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<i>as-install</i>	Enterprise Server のベースインストールディレクトリを表します。	Solaris™ および Linux プラットフォームへのインストールで、ルートユーザーでない場合: <i>user's-home-directory/SUNWappserver</i> Solaris および Linux プラットフォームへのインストールで、ルートユーザーである場合: <i>/opt/SUNWappserver</i> Windows のすべてのインストールの場合: <i>SystemDrive:\Sun\AppServer</i>
<i>domain-root-dir</i>	すべてのドメインを含むディレクトリを表します。	すべてのインストールの場合: <i>as-install/domains/</i>
<i>domain-dir</i>	ドメインのディレクトリを表します。 設定ファイルには、次のように表される <i>domain-dir</i> があります。 <code>\${com.sun.aas.instanceRoot}</code>	<i>domain-root-dir/domain-dir</i>
<i>instance-dir</i>	サーバーインスタンスのディレクトリを表します。	<i>domain-dir/instance-dir</i>
<i>samples-dir</i>	サンプルアプリケーションを含むディレクトリを表します。	<i>as-install/samples</i>
<i>docs-dir</i>	ドキュメントを含むディレクトリを表します。	<i>as-install/docs</i>

## 表記上の規則

この表は、このドキュメントで使用される表記の種類について説明したものです。

表 P-3 表記上の規則

書体	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、および画面上のコンピュータ出力	.login ファイルを編集します。  ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。  machine_name% you have mail.
<b>AaBbCc123</b>	ユーザーが入力する文字 (画面上のコンピュータ出力と区別して表示)	machine_name% <b>su</b> パスワード:
AaBbCc123	実際の名前または値に置き換えられるプレースホルダ	ファイルを削除するコマンドは、rm <i>filename</i> です。
AaBbCc123	書名、新しい用語、および強調する用語 (オンラインでは、一部の強調項目は太字で表示される)	ユーザーズガイドの第 6 章を参照してください。  キャッシュとは、ローカルに格納されているコピーです。  ファイルを保存しないでください。

## 記号の表記ルール

この表は、このマニュアルで使用される記号について説明したものです。

表 P-4 記号の表記ルール

記号	説明	例	意味
[ ]	省略可能な引数やコマンドオプションが含まれます。	ls [-l]	-l オプションは必須ではありません。
{   }	必須コマンドオプションの選択項目が含まれています。	-d {y n}	-d オプションには、y 引数または n 引数のいずれかを使用する必要があります。
\${ }	変数参照を示します。	\${com.sun.javaRoot}	com.sun.javaRoot 変数の値を参照します。
-	同時に実行する複数のキーストロークを結び付けます。	Control-A	コントロールキーを押しながら A キーを押します。
+	連続で複数のキーストロークを行います。	Ctrl + A + N	Control キーを押して離してから、次のキーを押します。

表 P-4 記号の表記ルール (続き)

記号	説明	例	意味
→	グラフィカルユーザーインターフェースでのメニュー項目の選択を示します。	「ファイル」→「新規」→「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから、「テンプレート」を選択します。

## ドキュメント、サポート、およびトレーニング

Sun の Web サイトには、次に示す関連情報が示されています。

- ドキュメント (<http://www.sun.com/documentation/>)
- サポート (<http://www.sun.com/support/>)
- トレーニング (<http://www.sun.com/training/>)

## 第三者の Web サイト参照

このマニュアル内で参照している第三者の URL は、追加の関連情報を提供します。

---

注- このマニュアル内で引用する第三者の Web サイトの可用性について Sun は責任を負いません。こうしたサイトやリソース上の、またはこれらを通じて利用可能な、コンテンツ、広告、製品、その他の素材について、Sun は推奨しているわけではなく、Sun はいかなる責任も負いません。こうしたサイトやリソース上の、またはこれらを経由して利用可能な、コンテンツ、製品、サービスを利用または信頼したことによって発生した(あるいは発生したと主張される)いかなる損害や損失についても、Sun は一切の責任を負いません。

---

## このマニュアルに関するコメント

弊社では、ドキュメントの改善に努めており、お客様からのコメントおよびご忠告をお受けしております。

コメントを共有するには、<http://docs.sun.com> を参照し、「Feedback」をクリックしてください。このオンラインフォームでは、マニュアルのタイトルと Part No. もご記入ください。Part No. は、7桁か9桁の番号で、マニュアルのタイトルページまたは最初のページに記載されています。



# 製品概念

---

Sun GlassFish Enterprise Server は、Java EE アプリケーションの開発、配備、および管理のための堅牢なプラットフォームを提供します。主な機能には、スケーラブルトランザクション管理、Web サービスパフォーマンス、クラスタ化、セキュリティ、および統合機能があります。

この章の内容は次のとおりです。

- 19 ページの「Java EE プラットフォームの概要」
- 23 ページの「Application Server のコンポーネント」
- 30 ページの「高可用性データベース」
- 38 ページの「セットアップと設定のロードマップ」

## Java EE プラットフォームの概要

Enterprise Server は、Java 2 Enterprise Edition (Java EE) 1.4 テクノロジーを実装します。Java EE プラットフォームは、アプリケーションコンポーネント、API、およびアプリケーションサーバーの実行時コンテナとサービスについて記述した標準仕様のセットです。

## Java EE アプリケーション

Java EE アプリケーションは、JavaServer Pages (JSP)、Java サーブレット、Enterprise JavaBeans (EJB) モジュールなどのコンポーネントで構成されます。ソフトウェア開発者はこれらのコンポーネントを利用して、大規模分散アプリケーションを構築できます。開発者は Java EE アプリケーションを、zip ファイルに似た Java アーカイブ (JAR) ファイルにパッケージ化して本番サイトに配布できます。管理者は、Java EE JAR ファイルを 1 つ以上のサーバーインスタンス (またはインスタンスのクラスタ) に配備することにより、Java EE アプリケーションを Application Server 上にインストールします。

次の図は、以降の節で説明する Java EE プラットフォームのコンポーネントを示したものです。

申し訳ございません: 現在、図が用意できておりません。

## コンテナ

各サーバーインスタンスには、2つのコンテナ (Web コンテナと EJB コンテナ) が含まれます。コンテナは、Java EE コンポーネントのセキュリティーやトランザクション管理などのサービスを提供する実行時環境です。JavaServer Pages (JSP) やサーブレットなどの Web コンポーネントは、Web コンテナ内で実行されます。Enterprise JavaBeans は EJB コンテナ内で実行されます。

## Java EE サービス

Java EE プラットフォームは、次のようなサービスをアプリケーションに対して提供します。

- ネーミング-ネームサービスとディレクトリサービスは、オブジェクトを名前に関連付けます。Java EE アプリケーションは、オブジェクトの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名を検索することによってオブジェクトを検出できます。
- セキュリティー - Java Authorization Contract for Containers (JACC) は、Java EE コンテナに関して定義された一連のセキュリティー規約です。クライアントの ID に基づいて、コンテナはコンテナのリソースおよびサービスに対するアクセスを制限できます。
- トランザクション管理 - トランザクションは作業の分割不能な単位です。たとえば、銀行口座間での資金の振り替えがトランザクションにあたります。トランザクション管理サービスは、トランザクションが完了するか、またはロールバックされるかの二者択一性を保証します。
- メッセージサービス - 別々のシステム上でホストされたアプリケーション同士が、Java™ Message Service (JMS) を利用してメッセージを交換することによって互いに通信できます。JMS は Java EE プラットフォームの根幹的な部分であり、異機種システム混在のエンタープライズアプリケーションを統合する作業を簡略化します。

## Web サービス

クライアントは HTTP、RMI/IIOP、JMS 経由でのアクセスに加えて、リモート Web サービスとして Java EE アプリケーションにアクセスできます。Web サービスは、Java API for XML-based RPC (JAX-RPC) を使用して実装されます。Java EE アプリ

ケーションは Web サービスに対するクライアントとして動作することもでき、これはネットワークアプリケーションで典型的な構成です。

Web Services Description Language (WSDL) は、Web サービスのインタフェースを記述する XML 形式です。Web サービスのコンシューマは、WSDL ドキュメントを動的に解析して、Web サービスが提供する操作とその実行方法を特定できます。Application Server では、ほかのアプリケーションが Java API for XML Registries (JAXR) を経由してアクセス可能なレジストリを使用して、Web サービスインタフェースの記述を分散させています。

## クライアントアクセス

クライアントは複数の方法で Java EE アプリケーションにアクセスできます。ブラウザクライアントは、ハイパーテキストトランスファープロトコル (HTTP) を使用して Web アプリケーションにアクセスします。セキュリティ保護された通信のために、ブラウザでは、Secure Sockets Layer (SSL) を使用する HTTPS プロトコルを利用します。

アプリケーションクライアントコンテナ内で動作するリッチクライアントアプリケーションは、オブジェクトリクエストブローカ (ORB)、リモートメソッド呼び出し (RMI) および IIOP (internet inter-ORB protocol)、または IIOP/SSL (セキュリティ保護された IIOP) を使用して Enterprise JavaBeans (EJB) を直接検索し、アクセスできます。そのようなアプリケーションは、HTTP/HTTPS、JMS、および JAX-RPC を使用してアプリケーションや Web サービスにアクセスできます。それらのアプリケーションでは JMS を使用して、アプリケーションおよびメッセージ駆動型 Beans との間でメッセージを送受信します。

Java EE Web サービスにアクセスできるのは、WS-I Basic Profile (Web サービス相互運用性基本プロファイル) に準拠したクライアントです。WS-I は Java EE 標準の根幹的な部分であり、Web サービスの相互運用性について定義しています。WS-I に準拠することにより、サポートされているすべての言語で記述されたクライアントが、Application Server に配備された Web サービスにアクセスできます。

最適なアクセス機構は、個別のアプリケーションおよび予想されるトラフィック量によって異なります。Application Server は、HTTP、HTTPS、JMS、IIOP、および IIOP/SSL のそれぞれに対応した設定が可能なリスナーをサポートします。各プロトコルに対して複数のリスナーを設定し、スケーラビリティと信頼性を高めることができます。

Java EE アプリケーションは、ほかのサーバー上に配備された EJB モジュールなどの Java EE コンポーネントのクライアントとしても動作でき、これらのアクセス機構のうち任意のものを使用できます。

## 外部システムとリソース

Java EE プラットフォームでは、外部のシステムのことをリソースと呼びます。たとえば、データベース管理システムは JDBC リソースです。各リソースは、その Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名によって一意に識別されます。アプリケーションは、次の API とコンポーネントを通して外部システムにアクセスします。

- **Java Database Connectivity (JDBC)** - データベース管理システム (DBMS) は、データを格納、組織化、および取得するための機能を提供します。大部分のビジネスアプリケーションは、アプリケーションが JDBC 経由でアクセスするリレーショナルデータベースにデータを格納します。Application Server に含まれる PointBase DBMS は、サンプルアプリケーションでの使用、アプリケーション開発、プロトタイプ作成などの用途に適していますが、配備用途には適していません。Application Server では、各種の主要リレーショナルデータベースに接続するための、動作確認済み JDBC ドライバを提供しています。これらのドライバは配備に適しています。
- **Java Message Service (JMS)** - メッセージングは、ソフトウェアコンポーネントまたはアプリケーション間で通信を行うための手段です。メッセージングクライアントは、Java Messaging Service (JMS) API を実装するメッセージングプロバイダを介して、任意のほかのクライアントとの間でメッセージを送受信します。Application Server には、高性能な JMS ブローカーである Sun Java System Message Queue が含まれています。Application Server Platform Edition には、Message Queue の無償版である Platform Edition が含まれます。Sun GlassFish Enterprise Server には、クラスタ化とフェイルオーバーをサポートする Message Queue Enterprise Edition が含まれています。
- **Java EE コネクタ** - Java EE コネクタアーキテクチャーは、Java EE アプリケーションと既存の企業情報システム (EIS) との統合を可能にします。アプリケーションは、コネクタまたはリソースアダプタと呼ばれる、移植性のある Java EE コンポーネントを介して、JDBC ドライバを使用した RDBMS へのアクセスと同様の方法で EIS にアクセスします。リソースアダプタは、スタンドアロンのリソースアダプタアーカイブ (RAR) モジュールとして配布されるか、または Java EE アプリケーションアーカイブに組み込まれます。RAR 形式のリソースアダプタは、ほかの Java EE コンポーネントと同様に配備されます。Application Server には、一般的な EIS との統合が可能な評価用のリソースアダプタが含まれています。
- **JavaMail** - アプリケーションは JavaMail API を介して Simple Mail Transport Protocol (SMTP) サーバーにアクセスし、電子メールを送受信できます。

# Application Server のコンポーネント

この節では、Sun Java System Application Server のコンポーネントについて説明します。

- 23 ページの「サーバーインスタンス」
- 23 ページの「管理ドメイン」
- 25 ページの「クラスタ」
- 25 ページの「ノードエージェント」
- 26 ページの「名前付き設定」
- 27 ページの「HTTP ロードバランサプラグイン」
- 29 ページの「クラスタ内の I/O 負荷分散」
- 29 ページの「Message Queue と JMS リソース」

まず、ブラウザベースの管理コンソールなどの管理ツールがドメイン管理サーバー (DAS) と通信し、その後 DAS がノードエージェントまたはサーバーインスタンスと通信します。

## サーバーインスタンス

サーバーインスタンスは、単一の Java 仮想マシン (JVM) プロセス内で実行される Application Server です。Application Server は、Java 2 Standard Edition (J2SE) 5.0 および Java SE 6 での動作が検証されています。推奨される Java EE 配布は Application Server のインストールに含まれています。

Application Server と付属の JVM はともに、マルチプロセッサ構成で拡大縮小するように設計されているため、通常は 1 台のマシン上に 1 つのサーバーインスタンスを作成すれば十分です。ただし、アプリケーションの隔離と順次アップグレードのために、1 台のマシン上に複数のインスタンスを作成すると有利な場合もあります。場合によっては、複数のインスタンスが動作する 1 台の大規模サーバーを複数の管理ドメインで使用できます。管理ツールを使用することで、複数のマシンにまたがってサーバーインスタンスを容易に作成、削除、および管理できます。

## 管理ドメイン

管理ドメイン (または単にドメイン) は、まとめて管理されるサーバーインスタンスのグループです。1 つのサーバーインスタンスは単一の管理ドメインに属します。ドメイン内のインスタンスは、複数の異なる物理ホスト上で実行できます。

Application Server の 1 つのインストールから複数のドメインを作成できます。サーバーインスタンスをドメインにグループ化することにより、さまざまな組織および管理者が 1 つの Application Server インストールを共有できます。各ドメインには、固有の設定、ログファイル、およびアプリケーションの配備領域があり、こ

れらはほかのドメインとは無関係です。あるドメインの構成を変更しても、ほかのドメインの構成には影響しません。同様に、あるドメインにアプリケーションを配備しても、そのアプリケーションがほかのドメインに配備されたり、ほかのドメインから認識可能になることはありません。管理者は常に1つのドメインに対する認証しか受けられず、そのドメイン上での管理しか実行できません。

## ドメイン管理サーバー (DAS)

ドメインには1つのドメイン管理サーバー (DAS) があります。これは、管理アプリケーションのホストとなる、特別に設計されたアプリケーションサーバーインスタンスです。DAS は管理者を認証し、管理ツールからの要求を受け付け、ドメイン内のサーバーインスタンスと通信して要求を実行します。

管理ツールには、コマンド行ツールの `asadmin` と、ブラウザベースの管理コンソールがあります。Application Server では、サーバー管理のための JMX ベースの API も提供されます。管理者が同時に表示および管理できるのは1つのドメインのみであり、これによってセキュリティーで保護された分離が実現されています。

DAS のことを管理サーバーまたはデフォルトサーバーと呼ぶ場合もあります。DAS をデフォルトサーバーと呼ぶ理由は、一部の管理操作のデフォルトターゲットであるためです。

DAS はアプリケーションサーバーインスタンスであるため、テスト目的で Java EE アプリケーションをホストすることもできます。ただし、本番アプリケーションのホストを目的として DAS を使用しないでください。たとえば、本番アプリケーションをホストする予定のクラスタやインスタンスをまだ作成していない場合に、アプリケーションを DAS に配備することができます。

DAS は、各ドメインおよびすべての配備済みアプリケーションの設定を格納するリポジトリを保持します。DAS がアクティブでないか停止している場合、アクティブなサーバーインスタンスのパフォーマンスまたは可用性への影響はありませんが、管理上の変更は実行できません。状況によっては、セキュリティー上の理由から、本番構成を凍結することなどを目的として意図的に DAS プロセスを停止すると便利な場合があります。

ドメイン設定やアプリケーションをバックアップおよび復元するための管理コマンドが用意されています。標準のバックアップ手順および復元手順を使用して、作業中の構成を迅速に復元できます。DAS ホストで障害が発生した場合、以前のドメイン設定を復元するために新しい DAS インストールを作成する必要があります。手順については、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 管理ガイド](#)』の「[ドメイン管理サーバーの再作成](#)」を参照してください。

Sun Cluster Data Services は、DAS ホストの IP アドレスのフェイルオーバーと、グローバルファイルシステムの使用によって高可用性を実現します。このソリューションにより、多くの種類の障害に対してほとんど停止しないレベルの可用性が、DAS およびリポジトリに対して提供されます。Sun Cluster Data Services

は、Sun Java Enterprise System に付属するか、または Sun Cluster とともに別途購入する形で提供されます。詳細は、Sun Cluster Data Services のドキュメントを参照してください。

## クラスタ

クラスタとは、同じアプリケーション、リソース、および設定情報を共有するサーバーインスタンスの集まりに名前を付けたものです。異なるマシン上のサーバーインスタンスを1つの論理クラスタにまとめ、それらのインスタンスを1つの単位として管理できます。マルチマシンクラスタのライフサイクルは、DAS を使用して容易に制御できます。

クラスタにより、水平方向のスケラビリティ、負荷分散、およびフェイルオーバー保護が使用可能になります。定義により、クラスタ内のすべてのインスタンスに対してリソースとアプリケーションの設定は同じになります。あるサーバーインスタンスまたはクラスタ内のあるマシンに障害が起きると、ロードバランサは障害を検出し、障害の起きたインスタンスからクラスタ内のほかのインスタンスにトラフィックをリダイレクトし、ユーザーセッションの状態を回復します。クラスタ内のすべてのインスタンス上には同一のアプリケーションとリソースがあるため、インスタンスはクラスタ内のほかのどのインスタンスにも処理を継続させることができます。

クラスタ、ドメイン、およびインスタンスの関係は次のようになります。

- 1つの管理ドメイン内に任意の数(0個を含む)のクラスタを作成できます。
- 1つのクラスタは1つ以上のサーバーインスタンスで構成できます。
- 1つのクラスタは単一のドメインに属します。

## ノードエージェント

ノードエージェントは、DAS をホストするマシンを含め、サーバーインスタンスをホストするすべてのマシン上で実行される軽量プロセスです。ノードエージェントは次の機能を実行します。

- DAS の指示に従い、サーバーインスタンスを起動および停止します。
- 障害の発生したサーバーインスタンスを再起動します。
- 障害が発生したサーバーのログファイルのビューを提供し、リモート診断を支援します。
- DAS がその監視下のサーバーインスタンスを起動するときに、各サーバーインスタンスのローカル設定リポジトリを DAS の集中リポジトリと同期します。
- インスタンスが最初に作成される時、インスタンスに必要なディレクトリを作成し、インスタンスの設定を集中リポジトリと同期します。

- サーバーインスタンスが削除されるときに適切なクリーンアップを実行します。

各物理ホストには、ホストが属する各ドメインに対して少なくとも1つのノードエージェントが必要です。1台の物理ホストに、複数のドメインに属するインスタンスを配置する場合、そのホストにはそれぞれのドメインに対するノードエージェントが必要です。ホスト上のドメインごとに複数のノードエージェントを持つことは許可されていますが、利点はありません。

ノードエージェントはサーバーインスタンスを起動および停止するため、常に実行中である必要があります。したがって、ノードエージェントはオペレーティングシステムの起動時に起動されます。Solaris およびその他の Unix プラットフォームでは、ノードエージェントを `inetd` プロセスによって起動できます。Windows では、ノードエージェントを Windows のサービスにすることができます。

ノードエージェントの詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 \(HA\) 管理ガイド](#)』の第3章「[ノードエージェントの設定](#)」を参照してください。

## 名前付き設定

名前付き設定は、Application Server のプロパティ設定をカプセル化する抽象化オブジェクトです。クラスタおよびスタンドアロンのサーバーインスタンスは、名前付き設定を参照してそれぞれのプロパティ設定を取得します。名前付き設定を使用することにより、IP アドレス、ポート番号、ヒープメモリー容量など一部の設定を除く Java EE コンテナの設定が、そのコンテナが位置する物理マシンから分離されます。名前付き設定を使用することにより、Application Server の管理をより強力に、また柔軟に行えるようになります。

設定変更を適用するには、単に名前付き設定のプロパティ設定を変更します。変更すると、その設定を参照するすべてのクラスタおよびスタンドアロンインスタンスが変更内容を取得します。名前付き設定の削除は、その設定へのすべての参照が削除済みの場合にしか行えません。1つのドメインに複数の名前付き設定を含めることができます。

Application Server には、`default-config` という名称のデフォルト設定が付属します。デフォルト設定は、Application Server Platform Edition の開発者の生産性を高めるように、また、セキュリティと可用性を高めるように最適化されています。

デフォルト設定をベースにして独自の名前付き設定を作成し、その設定を目的に合わせてカスタマイズできます。名前付き設定の作成と管理には、管理コンソールおよび `asadmin` コマンド行ユーティリティを使用します。

## HTTP ロードバランサプラグイン

ロードバランサは、複数の物理マシン間で作業負荷を分散させることによって、システムの全体的なスループットを向上させます。Enterprise Server には、Sun Java System Web Server、Apache Web Server、および Microsoft Internet Information Server 用のロードバランサプラグインが用意されています。

ロードバランサプラグインは、HTTP および HTTPS 要求を受け付け、それをクラスタ内のアプリケーションサーバーインスタンスのうちの 1 つに転送します。(ネットワーク障害により) インスタンスが停止して使用不能または応答不能になると、要求は既存の使用可能なマシンにリダイレクトされます。ロードバランサはまた、障害が起きたインスタンスが復旧したことを認識し、それに応じて負荷を再配分することもできます。

状態を持たない単純なアプリケーションであれば、負荷分散されたクラスタで十分なこともあります。しかし、セッション状態を持ったミッションクリティカルなアプリケーションの場合は、負荷分散されたクラスタを HADB とともに使用します。

システムで負荷分散を設定するには、Application Server に加えて、Web サーバーおよびロードバランサプラグインをインストールする必要があります。その後、次のことを行う必要があります。

- 負荷分散に参加させる Enterprise Server クラスタを作成します。
- 負荷分散用に設定したこれらのクラスタにアプリケーションを配備します。

負荷分散に関わるサーバーインスタンスとクラスタは、同種の環境を確保しています。これは、通常、サーバーインスタンスが同じサーバー設定を参照し、同じ物理リソースにアクセスでき、さらに配備された同じアプリケーションを持っていることを意味します。この均質性によって、障害の前後に、ロードバランサが常に負荷を均等にクラスタ内のアクティブなインスタンスに分散することが保証されます。

asadmin コマンド行ツールを使用して、ロードバランサ設定を作成し、クラスタおよびサーバーインスタンスへの参照をその設定に追加し、クラスタでロードバランサによる参照を有効にし、アプリケーションで負荷分散を有効にし、必要に応じて健全性検査を作成し、ロードバランサ設定ファイルを生成し、最後に、ロードバランサ設定ファイルを Web サーバーの config ディレクトリにコピーします。管理者は、スクリプトを作成してこのプロセス全体を自動化できます。

詳細と完全な設定手順については、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 4 章「HTTP 負荷分散の設定」を参照してください。

## セッション持続性

Java EE アプリケーションは一般に、大量のセッション状態データを保持しています。Web ショッピングカートは、セッション状態の古典的な例です。アプリケーションはまた、頻繁に必要なデータをセッションオブジェクトに

キャッシュすることもできます。実際、ユーザーとの対話が多いほぼすべてのアプリケーションには、セッション状態の保持が必要になります。HTTPセッションとステートフルセッション Bean (SFSB) の両方がセッション状態データを持ちます。

セッション状態はデータベースに格納されたトランザクション状態ほど重要ではありませんが、サーバー障害のセッション状態を保存することは、エンドユーザーにとって重要になる場合があります。Application Server には、このセッション状態をリポジトリに保存 (保持) する機能が用意されています。ユーザーセッションをホストするアプリケーションサーバーインスタンスで障害が発生した場合、そのセッション状態の復元が可能です。情報を失うことなくそのセッションを継続できます。

Application Server は、次のタイプのセッション持続性ストアをサポートします。

- メモリー
- 高可用性 (HA)
- ファイル

メモリーを使用した持続性では、状態は常にメモリー内に保持され、障害が発生すると情報は失われます。HA 形式の持続性では、Application Server は HTTP セッションと SFSB セッションの両方で HADB を持続性ストアとして使用します。ファイルを使用した持続性では、Application Server はセッションオブジェクトを直列化し、それらのオブジェクトを、セッションマネージャーのプロパティーで指定されたファイルシステム上の位置に格納します。SFSB に関しては、HA 形式の持続性を指定しない場合、Application Server はこの位置の session-store サブディレクトリに状態情報を格納します。

保存が必要な変更がないかどうか、SFSB の状態をチェックする処理のことを「チェックポイント設定」と呼びます。チェックポイント設定を有効にした場合、この処理は通常、トランザクションがロールバックした場合を含め、SFSB が関係するすべてのトランザクションの完了後に発生します。ステートフルセッション Bean の開発の詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Developer's Guide](#)』の「[Using Session Beans](#)」を参照してください。SFSB フェイルオーバーの有効化の詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 \(HA\) 管理ガイド](#)』の「[ステートフルセッション Bean のフェイルオーバー](#)」を参照してください。

Application Server がサービスを提供している要求の数とは別に、セッション持続性の設定は、各要求内のセッション情報だけでなく、HADB が 1 分あたりに受信する要求の数にも影響します。

セッション持続性の設定の詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 \(HA\) 管理ガイド](#)』の第 7 章「[高可用性 \(HA\) セッション持続性とフェイルオーバーの設定](#)」を参照してください。

## クラスタ内の IIOP 負荷分散

IIOP 負荷分散では、IIOP クライアントの要求が複数の異なるサーバーインスタンスまたはネームサーバーに分散されます。目標は、負荷をクラスタ間に均等に拡散して、スケーラビリティを実現することです。IIOP 負荷分散と、EJB クラスタ化および Sun Java System Application Server の可用性機能を組み合わせることにより、負荷分散に加えて EJB フェイルオーバーも実現されます。

クライアントがオブジェクトに対して JNDI 検索を実行すると、ネームサービスは、特定のサーバーインスタンスに関連付けられた InitialContext (IC) オブジェクトを作成します。それ以降、その IC オブジェクトを使用して作成された検索要求はすべて、同じサーバーインスタンスに送信されます。その InitialContext を使用して検索された EJBHome オブジェクトはすべて、同じターゲットサーバーにホストされます。また、それ以降に取得された Bean 参照もすべて、同じターゲットホスト上に作成されます。InitialContext オブジェクトの作成時に、ライブターゲットサーバーのリストがすべてのクライアントによってランダムに選択されるため、これにより負荷分散が効果的に実現されます。ターゲットサーバーインスタンスが停止すると、検索または EJB メソッド呼び出しは、別のサーバーインスタンスに処理が引き継がれます。

たとえば、この図で示されている ic1、ic2、および ic3 は、クライアント 2 のコードで作成される 3 つの異なる InitialContext インスタンスです。それらはクラスタ内の 3 つのサーバーインスタンスに分散されます。そのため、このクライアントによって作成される EJB は 3 つのインスタンス間に分散されます。クライアント 1 は InitialContext オブジェクトを 1 つだけ作成したため、このクライアントからの Bean 参照はサーバーインスタンス 1 のみです。サーバーインスタンス 2 がダウンした場合、ic2 の検索要求は別のサーバーインスタンス (サーバーインスタンス 3 とは限らない) にフェイルオーバーします。以前にサーバーインスタンス 2 でホストされていた Bean に対するすべての Bean メソッド呼び出しも、そのように処理するのが安全であれば、別のインスタンスに自動的にリダイレクトされます。検索のフェイルオーバーは自動的ですが、EJB モジュールは再試行が安全なときに限りメソッド呼び出しを再試行します。

RMI-IIOP 負荷分散とフェイルオーバーは、透過的に発生します。アプリケーションの配備中に、特別な手順は必要ありません。クラスタに新しいインスタンスを追加したり削除したりしても、そのクラスタに関する既存のクライアントの表示は更新されません。クライアント側で、端点の一覧を手動で更新する必要があります。

## Message Queue と JMS リソース

Sun Java System Message Queue (MQ) は、分散アプリケーションのための、信頼性のある非同期メッセージングを提供します。MQ は Java Message Service (JMS) 標準を実装するエンタープライズメッセージングシステムです。MQ は、メッセージ駆動型 Beans (MDB) などの Java EE アプリケーションコンポーネントに対してメッセージングを提供します。

Application Server は Sun Java System Message Queue を Application Server に統合することにより Java Message Service (JMS) API を実装します。Enterprise Server には、フェイルオーバー、クラスタ化、および負荷分散機能を備えた、Enterprise バージョンが含まれています。

基本的な JMS 管理タスクには、Application Server の管理コンソールおよび `asadmin` コマンド行ユーティリティを使用します。

Message Queue クラスタの管理など、高度なタスクの場合は、`install_dir/imq/bin` ディレクトリに用意されたツールを使用します。Message Queue の管理の詳細は、『Sun Java System Message Queue 管理ガイド』を参照してください。

メッセージフェイルオーバーのための JMS アプリケーションの配備および MQ クラスタ化の詳細は、55 ページの「Message Queue ブローカの配備の計画」を参照してください。

## 高可用性データベース

この節では、次の項目について説明します。

- 30 ページの「概要」
- 31 ページの「システム要件」
- 31 ページの「HADB のアーキテクチャー」
- 35 ページの「二重障害の防止」
- 35 ページの「HADB 管理システム」

### 概要

27 ページの「セッション持続性」では、Java EE アプリケーションでのセッション持続性の必要性について説明しました。Application Server では、高可用性セッションストアとして高可用性データベース (HADB) を使用します。HADB は Sun GlassFish Enterprise Server with HADB に含まれますが、配備では独立したホストで実行できません。HADB は、HTTP セッションおよびステートフルセッション Bean データの高可用性データストアを提供します。

この分離型アーキテクチャーには、次のような利点があります。

- 高可用性クラスタ内のサーバーインスタンスを疎結合し、高性能の Java EE コンテナとして機能させることができます。
- サーバーインスタンスの停止および起動が、ほかのサーバーやその可用性に影響を及ぼしません。
- HADB は、たとえばシングルプロセッサやデュアルプロセッサの、比較的安価なマシンの異なるセット上で実行できます。複数のクラスタがこれらのマシンを共有できます。配備のニーズに応じて、Application Server と同じマシン上で HADB

を実行する(共存)か、異なるマシン上で実行する(独立層)かを選択できます。この2つの選択肢の詳細は、65ページの「共存トポロジ」を参照してください。

- 状態管理の要件の変化に合わせて、既存のクラスタやその内部のアプリケーションに影響を及ぼすことなく、HADBシステムにリソースを追加できます。

---

注 - HADBはApplication Serverによる使用のために最適化されており、汎用データベースなどのアプリケーションによる使用は想定されていません。

---

HADBのハードウェアおよびネットワークシステムの要件については、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 リリースノート』の「ハードウェアとソフトウェアの要件」を参照してください。HADBに必要なその他のシステム設定手順については、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性(HA)管理ガイド』の第10章「高可用性(HA)データベースのインストールと設定」を参照してください。

## システム要件

HADBホストのシステム要件は次のとおりです。

- 各HADBノードに少なくとも1個のCPU
- 各ノードに最低512Mバイトのメモリー

ネットワーク構成の要件については、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性(HA)管理ガイド』の第10章「高可用性(HA)データベースのインストールと設定」を参照してください。さらに高度な可用性を実現するための追加要件については、35ページの「二重障害の防止」を参照してください。

## HADBのアーキテクチャー

HADBは、「ノード」のペアで構成される分散システムです。32ページの「データ冗長ユニット」で示すように、ノードは2つのデータ冗長ユニット(DRU)に分割され、1つのノードは各DRU内の各ペアに属します。

各ノードは次の要素で構成されます。

- トランザクション状態レプリケーションのためのプロセスのセット
- プロセス間の通信に使用される共有メモリーの専用領域
- 1つ以上の二次記憶装置(ディスク)

HADBノードの1つのセットが、1つ以上の「セッションデータベース」をホストすることができます。各セッションデータベースは、個別のアプリケーションサーバークラスタと関連付けられます。クラスタを削除すると、関連付けられたセッションデータベースも削除されます。

HADB ハードウェアの要件については、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 リリースノート』の「ハードウェアとソフトウェアの要件」を参照してください。

## ノードとノードプロセス

HADB ノードには、次の2種類があります。

- データを格納する「アクティブノード」。
- 最初はデータを含まないが、アクティブノードが使用不能になった場合にアクティブノードの役割を果たす「スペアノード」。スペアノードの使用は任意ですが、より高い可用性を達成するために役立ちます。

各ノードには、1つの親プロセスと複数の子プロセスがあります。ノードスーパーバイザー (NSUP) と呼ばれる親プロセスは、管理エージェントによって起動されます。このプロセスは、子プロセスの作成とその実行の継続の役割を果たします。

子プロセスには次のものがあります。

- トランザクションサーバープロセス (TRANS)。分散ノード上のトランザクションを調整し、データ記憶領域を管理します。
- 関係代数サーバープロセス (RELALG)。ソートや AND 結合などの複雑な関係代数クエリーを調整および実行します。
- SQL 共有メモリーサーバープロセス (SQLSHM)。SQL 辞書キャッシュを保守します。
- SQL サーバープロセス (SQLC)。クライアントのクエリーを受信し、それらをローカル HADB の命令にコンパイルし、命令を TRANS に送信し、結果を受け取ってクライアントに伝達します。各ノードには1つのメイン SQL サーバーと、個々のクライアント接続用に1つのサブサーバーがあります。
- ノードマネージャーサーバープロセス (NOMAN)。hadbm 管理クライアントによって発行された管理コマンドを実行するために管理エージェントが使用します。

## データ冗長ユニット

すでに説明したように、1つの HADB インスタンスには DRU のペアが1つ含まれます。各 DRU には、もう一対の DRU と同数のアクティブノードとスペアノードが存在します。DRU 内の各アクティブノードに対し、もう一方の DRU 内に「ミラーノード」が存在します。ミラーリングにより、各 DRU がデータベースの完全なコピーを保持します。

次の図は、6つのノードが存在するサンプルの HADB アーキテクチャーを示したものです。4つのアクティブノードと2つのスペアノードが存在します。ノード0とノード1はミラーペアです。ノード2とノード3も同様です。この例では、各ホストにあるノードは1つです。一般に、ホストに十分なシステムリソースがあれば、複数のノードを1つのホストに共存させることができます(31 ページの「システム要件」を参照)。

---

注-HADB ノードをホストするマシンは、ペアで(各 DRU に 1 台ずつ) 追加する必要があります。

---

HADB では、データおよびサービスをレプリケートすることによって高可用性を実現します。ミラーノード上のデータレプリカは、「プライマリレプリカ」および「ホットスタンバイレプリカ」として指定されます。プライマリレプリカは、挿入、削除、更新、読み取りなどの操作を実行します。ホットスタンバイレプリカは、プライマリレプリカの操作のログレコードを受信し、トランザクションの寿命内にそれらの操作を再実行します。読み取り操作はプライマリレプリカによってのみ実行されるため、ログに記録されません。各ノードにはプライマリレプリカとホットスタンバイレプリカの両方が含まれ、同じ役割を果たします。データベースは、DRU 内のアクティブノード間で断片化および分散されます。ミラーペア内の各ノードには、データフラグメントの同じ集合が含まれます。ミラーノードにデータを複製することを「レプリケーション」と呼びます。レプリケーションにより、HADB で高可用性を提供できます。あるノードで障害が発生した場合、ほとんど即時(数秒以内)にそのミラーノードへの引き継ぎが行われます。レプリケーションにより可用性が保証され、データやサービスを失うことなくノードまたは DRU の障害が隠蔽されます。

障害が発生したノードの機能を引き継ぐとき、ミラーノードでは 2 つの作業を実行する必要があります。ミラーノード自体の作業と、障害が発生したノードの作業です。ミラーノードに十分なリソースがない場合、過負荷によってミラーノードのパフォーマンスが低下し、ミラーノードの障害の可能性も高まります。あるノードで障害が発生すると、HADB はそのノードの再起動を試みます。ハードウェアの故障などが原因で、障害が発生したノードが再起動しない場合、システムは動作を続けますが可用性は低下します。

HADB は 1 つのノード、DRU 全体、または複数のノードの障害に対する耐性を備えますが、ノードおよびそのミラーで障害が発生したときの「二重障害」への耐性はありません。二重障害の可能性を下げる方法の詳細は、[35 ページの「二重障害の防止」](#)を参照してください。

## スペアノード

あるノードで障害が発生すると、そのミラーノードが元のノードの役割を引き継ぎます。障害が発生したノードにスペアノードがない場合、この時点で、障害が発生したノードにミラーがないことになります。スペアノードは、障害が発生したノードのミラーを自動的に置き換えます。スペアノードを用意しておくことにより、ミラーノードのない状態でシステムを運用する時間を短縮できます。

スペアノードは通常時はデータを保持しませんが、DRU 内のアクティブノードの障害を常に監視しています。ノードで障害が発生し、指定された期間内に復旧しない場合、スペアノードはミラーノードからデータをコピーし、ミラーノードとの同期を行います。この処理にかかる時間は、コピーされるデータの量と、システムおよ

びネットワークの能力によって異なります。同期後は、手動操作なしで、スペアノードによって自動的にミラーノードが置き換えられます。その結果、ミラーノードの過負荷が防止され、ミラー上の負荷が分散されます。この処理のことを「フェイルバック」または「自己修復」と呼びます。

障害が発生したホストが、ハードウェアの切り替えまたはソフトウェアのアップグレードによって復旧および再起動した場合、元のスペアノードがこの時点でアクティブノードになっているため、そのホストで実行中の1つ以上のノードがスペアノードとしてシステムに参加します。

スペアノードは必須ではありませんが、1台のマシンで障害が発生した場合でも、システムが全体的なサービスレベルを維持できるようにする効果があります。また、スペアノードを用意しておくことにより、アクティブノードのホストマシン上で計画的な保守を実施しやすくなります。スペアマシンの役割を果たす1台のマシンを各DRUに割り当てて、マシンのうち1台で障害が発生した場合でも、HADBシステムがパフォーマンスと可用性を低下させることなく運用を継続できるようにします。

---

注-原則として、十分な Application Server インスタンス数および HADB ノード数を持つスペアマシンが、使用不能になったマシンを代替するようにします。

---

## スペアノード構成の例

HADB 配備でのスペアノードの使用例を次に示します。使用できる配備トポロジは2種類あります。「共存」トポロジでは HADB と Application Server を同じホストに配置し、「独立層」トポロジでは両者を別々のホストに配置します。配備トポロジの詳細は、第3章「トポロジの選択」を参照してください。

### 例: 共存構成

スペアノード構成の例として、4台の Sun Fire™ V480 サーバーを使用し、各サーバーに1つの Application Server インスタンスと2つの HADB データノードを配置する共存トポロジを考えます。

スペアノード用に、さらに2台のサーバーを割り当てます(各 DRU に1台ずつ)。各スペアマシンでは、1つの Application Server インスタンスと2つのスペア HADB ノードを実行します。

### 例: 独立層構成

HADB 層に2台の Sun Fire™ 280R サーバーを配置し、それぞれが2つの HADB データノードを実行する個別層トポロジを考えます。1台のマシンが使用不能になった場合でもこのシステムの完全な能力を維持するには、Application Server インスタンス層と HADB 層のそれぞれに1台のスペアマシンを設定します。

Application Server インスタンス層のスペアマシンには、この層内のほかのマシンと同数のインスタンスが必要です。同様に、HADB 層用のスペアマシンには、この層内のほかのマシンと同数の HADB ノードが必要です。

## 二重障害の防止

HADB の組み込み型のデータレプリケーションにより、単一ノードまたは DRU 全体の障害に対する耐性を HADB に持たせることができます。デフォルトでは、HADB はミラーノードペアまたは両方の DRU で障害が発生した状況を指す「二重障害」を許容できません。そのような場合、HADB は使用不能になります。

前の節で説明したスペアノードの使用に加えて、次の手順に従うことにより、二重障害の可能性を最小化できます。

- 独立した電源装置の用意: 最適な耐障害性のために、1 つの DRU をサポートするサーバーは、(無停電電源装置を通じての) 独立した電力、処理装置、および記憶装置を備える必要があります。1 つの DRU で停電が発生した場合は、電源が復旧するまで、もう一方の DRU 内のノードが引き続き要求を処理します。
- 二重相互接続の実装: 単一のネットワーク障害に対する耐性を持たせるには、DRU 間でラインおよびスイッチをレプリケートします。

これらの手順は任意ですが、HADB インスタンスの全体的な可用性を高めます。

## HADB 管理システム

HADB 管理システムは、組み込み型のセキュリティーを提供し、マルチプラットフォーム管理を促進します。次の図で示すように、HADB 管理アーキテクチャーには次のコンポーネントが含まれます。

- 36 ページの「管理クライアント」
- 36 ページの「管理エージェント」
- 37 ページの「管理ドメイン」
- 37 ページの「リポジトリ」

図で示すように、HADB サービスを実行するすべてのマシン上で 1 つの HADB 管理エージェントが実行されます。各マシンは通常、1 つ以上の HADB ノードをホストします。Application Server ドメインと同様に、HADB 管理ドメインには多数のマシンが含まれます。データベースに耐障害性を持たせるには、ドメイン内に最低 2 台のマシンが必要であり、一般的には、DRU ペアを形成するために偶数のマシンを用意する必要があります。そのため、ドメインには多数の管理エージェントが含まれます。

図で示すように、ドメインには 1 つ以上のデータベースインスタンスを含めることができます。1 台のマシンに、1 つ以上のデータベースインスタンスに属する 1 つ以上のノードを含めることができます。

## 管理クライアント

HADBの「管理クライアント」はコマンド行ユーティリティー `hadbm` であり、HADBドメインとそのデータベースインスタンスを管理するためのものです。HADBサービスは、関連付けられた Application Server クラスタが停止しているときでも実行を継続できますが、サービスを削除する場合は注意深くサービスをシャットダウンする必要があります。 `hadbm` の使用法の詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 \(HA\) 管理ガイド](#)』の第11章「高可用性データベースの管理」を参照してください。

`asadmin` コマンド行ユーティリティーを使用して、高可用性クラスタと関連付けられた HADB インスタンスを作成および削除できます。詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 \(HA\) 管理ガイド](#)』の第7章「高可用性 (HA) セッション持続性とフェイルオーバーの設定」を参照してください。

## 管理エージェント

HADBの管理エージェントは、ホスト上のリソースにアクセスできる `ma` という名前のサーバープロセスです。たとえば、このプロセスはデバイスの作成やデータベースプロセスの起動を実行できます。管理エージェントは、データベースインスタンスの起動や停止などの管理クライアントコマンドを調整および実行します。

管理クライアントは、エージェントのアドレスおよびポート番号を指定することによって管理エージェントに接続します。接続したあとは、管理クライアントは管理エージェントを通して HADB にコマンドを送信します。エージェントは要求を受け取って実行します。したがって、ホストに対して `hadbm` 管理コマンドを発行する前に、そのホスト上で管理エージェントが実行されている必要があります。管理エージェントは、自動的に起動するシステムサービスとして設定できます。

## 管理エージェントの可用性の保証

HADB ノードスーパーバイザープロセスに障害が起きると、管理エージェントプロセスを再起動して、その可用性を確保します。そのため、配備目的では、HADBの全体的な可用性を維持するために、`ma` プロセスの可用性を保証する必要があります。再起動のあと、管理エージェントはドメイン内のほかのエージェントからドメインおよびデータベースの設定データを復旧します。

管理エージェントの可用性を保証するには、ホストのオペレーティングシステム (OS) を使用します。Solaris または Linux では、プロセスの障害またはオペレーティングシステムの再起動のあと、`init.d` が `ma` プロセスの可用性を保証します。Windows では、管理エージェントは Windows サービスとして動作します。そのため、エージェントで障害が発生した場合や OS が再起動する場合、OS が管理エージェントを再起動します。

## 管理ドメイン

HADBの管理ドメインはホストの集合であり、各ホストでは同じポート番号で管理エージェントが実行されています。ドメイン内のホストには、1つ以上のHADBデータベースインスタンスを含めることができます。管理ドメインは、エージェントが使用する共通のポート番号と、ドメインを作成したりエージェントをドメインに追加したときに生成される「ドメインキー」と呼ばれるIDによって定義されます。管理エージェントはマルチキャストを使用して通信するため、ドメインの一意IDを提供するドメインキーの役割は重要です。Application Serverドメインと一致するように、HADB管理ドメインを設定できます。

複数のデータベースインスタンスを1つのドメインに含めると、複数の開発者グループが個別のデータベースインスタンスを使用できるため、この構成は開発環境で役立ちます。場合によっては、この構成は本番環境でも役立つことがあります。

エージェントの管理操作は、ドメインに属するすべてのエージェント間で協調されます。hadbmコマンドを使用してデータベース設定を変更すると、すべてのエージェントがそれに従って設定を変更します。ノードのホスト上の管理エージェントが実行されていない場合、ノードを停止または再起動できません。ただし、一部のエージェントが使用不能な場合でも、HADB状態または設定変数の値を読み取るhadbmコマンドを実行できます。

管理ドメインを操作するには、次の管理クライアントコマンドを使用します。

- **hadbm createdomain:** ホストを指定して管理ドメインを作成します。
- **hadbm extenddomain:** 既存の管理ドメインにホストを追加します。
- **hadbm deletedomain:** 管理ドメインを削除します。
- **hadbm reducedomain:** 管理ドメインからホストを削除します。
- **hadbm listdomain:** 管理ドメインに定義されたすべてのホストを表示します。

## リポジトリ

管理エージェントは、データベース設定をHADBの「リポジトリ」に格納します。リポジトリはすべての管理エージェント間でレプリケートされるため、高い耐障害性を備えています。サーバー上に設定を保持することにより、管理クライアントがインストールされている任意のコンピュータから管理操作を実行できるようになります。

リポジトリに対して何らかの変更を実行するには、ドメイン内の管理エージェントの大半が実行中である必要があります。したがって、ドメイン内にM個のエージェントがある場合、リポジトリに変更を行うには、少なくとも $M/2 + 1$  (端数を切り捨てた整数値) 個のエージェントが実行中である必要があります。

ハードウェアの故障などが原因でドメイン内の一部のホストが使用不能であり、エージェント数不足のため一部の管理コマンドを実行できない場合は、hadbm disablehostコマンドを使用して、障害が発生したホストをドメインから削除します。

## セットアップと設定のロードマップ

### ▼ 高可用性のために **Application Server** をセットアップおよび設定するには

- 1 第1章「製品概念」の説明に従って、パフォーマンスおよびQoSの要件と目標を決定します。
- 2 第1章「製品概念」の52ページの「設計上の決定」の説明に従って、システムの規模を決定します。
  - Application Server インスタンスの数
  - HADB ノードおよびHADB ホストの数
  - HADB のストレージ容量
- 3 第3章「トポロジの選択」の説明に従って、システムトポロジを決定します。  
ここでは、Application Server と同じホストマシンまたは異なるマシンのどちらかにHADBをインストールするかを決定します。
- 4 HADBやWebサーバーなどの関連するサブコンポーネントとともに、**Application Server** インスタンスをインストールします。
- 5 ドメインとクラスタを作成します。
- 6 **Web** サーバーソフトウェアを設定します。
- 7 ロードバランサプラグインをインストールします。
- 8 負荷分散をセットアップおよび設定します。
- 9 **HADB** ノードおよび**DRU**をセットアップおよび設定します。
- 10 **HA** セッション持続性のために**ASWeb** コンテナおよび**EJB** コンテナを設定します。
- 11 アプリケーションを配備し、高可用性およびセッションフェイルオーバーのために設定します。
- 12 メッセージを多く利用する場合、フェイルオーバーのために**JMS** クラスタを設定します。  
詳細は、『Sun Java System Message Queue 管理ガイド』を参照してください。

## 配備の計画

---

Application Server を配備する前に、まずパフォーマンスと可用性の目標を決定したあと、それに応じてハードウェア、ネットワーク、およびストレージの要件に関する決定を行います。

この章で説明する内容は次のとおりです。

- 39 ページの「パフォーマンス目標の確立」
- 46 ページの「ネットワーク構成の計画」
- 49 ページの「可用性のための計画」
- 52 ページの「設計上の決定」
- 55 ページの「Message Queue ブローカの配備の計画」

### パフォーマンス目標の確立

高パフォーマンスのもっとも単純な意味は、スループットを最大化し、応答時間を短縮することです。これらの基本的な目標を超えて特定の目標を確立するには、次の内容を決定します。

- 配備するアプリケーションやサービスの種類と、クライアントからのアクセス方法。
- 高可用性を必要とするアプリケーションやサービス。
- アプリケーションはセッション状態を持つか、または状態を持たないか。
- システムでサポートする必要がある要求の容量またはスループット。
- システムでサポートする必要がある並行ユーザーの数。
- ユーザー要求に対する許容可能な平均応答時間。
- 要求の間の平均思考時間。

これらのメトリックスの一部は、リモートブラウザエミュレータ (RBE) ツールか、または予測されるアプリケーションアクティビティのシミュレーションを行う Web サイトのパフォーマンスおよびベンチマークソフトウェアを使用して計算できます。一般に、RBE やベンチマーク製品は並行 HTTP 要求を生成し、次に 1 分あた

りの特定数の要求に対する応答時間を報告します。これらの数値を使用することによって、サーバアクティビティを計算できます。

この章で説明されている計算の結果は絶対ではありません。Application Server や独自のアプリケーションのパフォーマンスを微調整するときには照合するための参照点として扱ってください。

この節では、次の項目について説明します。

- 40 ページの「スループットの見積もり」
- 41 ページの「Application Server インスタンスへの負荷の見積もり」
- 44 ページの「HADB への負荷の見積もり」
- 47 ページの「帯域幅の要件の見積もり」
- 48 ページの「ピーク負荷の見積もり」

## スループットの見積もり

広義では、スループットは Enterprise Server によって実行された作業の量を測定します。Enterprise Server の場合、スループットは、サーバインスタンスあたり、1 分あたりに処理された要求の数として定義できます。また、高可用性アプリケーションでは、セッション状態データが定期的に保存されるため、HADB にもスループット要件が課せられます。HADB の場合、スループットは、1 分あたりに格納されるセッションデータの量として定義できます。これは、1 分あたりの HADB 要求の数と、1 要求あたりの平均セッションサイズの積です。

次の節で説明するように、Enterprise Server のスループットは、ユーザー要求の性質やサイズ、ユーザーの数、Enterprise Server インスタンスやバックエンドデータベースのパフォーマンスを含む、多くの要因から成る関数です。シミュレートされた作業負荷のベンチマークによって、1 台のマシンでのスループットを見積もることができます。

高可用性アプリケーションでは、データが HADB に定期的に保存されるため、追加のオーバーヘッドが発生します。このオーバーヘッドの量は、データの量、データが変更される頻度、およびデータの保存頻度によって異なります。最初の 2 つの要因は対象のアプリケーションによって異なり、さらに後者はサーバ設定によっても影響されます。

HADB のスループットは、1 分あたりの HADB 要求の数に、1 要求あたりの平均データ量を掛けた値として定義できます。HADB のスループットを向上させるには、より多くの HADB ノードと、より大きいストアサイズが必要になります。

# Application Server インスタンスへの負荷の見積もり

Enterprise Server インスタンスへの負荷を見積もるには、次の要因を考慮してください。

- 41 ページの「並行ユーザーの最大数」
- 41 ページの「思考時間」
- 42 ページの「平均応答時間」
- 43 ページの「1分あたりの要求数」

## 並行ユーザーの最大数

ユーザーは、Web ブラウザや Java プログラムなどのクライアントを介してアプリケーションと対話します。ユーザーのアクションに基づいて、クライアントは Enterprise Server に要求を定期的に送信します。ユーザーは、そのユーザーのセッションが期限切れでなく、終了されてもいないかぎり、アクティブと見なされます。並行ユーザーの数を見積もる場合は、すべてのアクティブユーザーを含めてください。

最初は、ユーザーの数が増えると、それに対応してスループットが増加します。ただし、並行要求の数が増えるにつれてサーバーパフォーマンスが飽和し始めるため、スループットは低下し始めます。

並行ユーザーを追加した場合に1分あたりに処理できる要求の数が減る点を特定します。この点は、最適なパフォーマンスに達しており、それを超えるとスループットが低下し始める時点を示します。一般には、システムをできるだけ最適なスループットで動作させるようにしてください。追加の負荷を処理し、スループットを向上させるには、処理能力の追加が必要になる場合があります。

## 思考時間

ユーザーが要求を連続して送信することはありません。ユーザーが要求を送信すると、サーバーがその要求を受信し、処理したあと、結果を返します。ユーザーはその時点で、新しい要求を送信する前に一定の時間を費やします。ある要求から次の要求までの時間を、思考時間と呼びます。

思考時間は、ユーザーの種類に依存します。たとえば、Web サービスの場合のようなマシン同士の対話では一般に、思考時間は人間同士の対話より短くなります。思考時間を見積もるために、マシンと人間の対話の混在を考慮することが必要な場合があります。

平均思考時間の特定は重要です。この所要時間を使用すると、1分あたりに完了する必要のある要求の数や、システムでサポートできる並行ユーザーの数を計算できません。

## 平均応答時間

応答時間とは、Enterprise Server が、要求の結果をユーザーに返すために費やす時間のことを指します。応答時間は、ネットワーク帯域幅、ユーザーの数、送信される要求の数とタイプ、平均思考時間などの要因によって影響されます。

ここでは、応答時間は平均の応答時間を指します。要求のタイプごとに、独自の最小応答時間があります。ただし、システム性能を評価する場合は、すべての要求の平均応答時間に基づいて分析します。

応答時間が速ければ速いほど、1分あたりに処理される要求が増えます。ただし、システム上のユーザーの数が増えるにつれ、1分あたりの要求の数が低下するにもかかわらず応答時間も増え始めます。

この図のようなシステム性能のグラフは、特定の点を過ぎると、1分あたりの要求数が応答時間に反比例することを示しています。点線の矢印で表されているように、1分あたりの要求数の低下が激しければ激しいほど、応答時間の増加も急になります。

この図の場合、ピーク負荷の点は、1分あたりの要求数が低下し始める時点になります。この点より前は、数式にピークの数値が使用されていないため、応答時間の計算は必ずしも正確ではありません。この点よりあとは、1分あたりの要求数と応答時間の間に反比例の関係があるため、管理者は、ユーザーの最大数と1分あたりの要求数を使用して応答時間をより正確に計算できます。

ピーク負荷時の応答時間(秒単位)である  $T_{\text{response}}$  を特定するには、次の数式を使用します。

$$T_{\text{response}} = n/r - T_{\text{think}}$$

次に、各引数について説明します。

- $n$  は、並行ユーザーの数です。
- $r$  は、サーバーが受信する1秒あたりの要求の数です。
- $T_{\text{think}}$  は、平均思考時間(秒単位)です。

正確な応答時間結果を得るには、必ず式に思考時間を含めてください。

### 例2-1 応答時間の計算

次の条件が存在する場合、

- ピーク負荷時にシステムでサポートできる並行ユーザーの最大数 ( $n$ ) は 5,000。
- ピーク負荷時にシステムで処理できる要求の最大数 ( $r$ ) は 1秒あたり 1,000。

平均思考時間 ( $T_{\text{think}}$ ) は 1 要求あたり 3 秒。

応答時間の計算は次のようになります。

$$T_{\text{response}} = n/r - T_{\text{think}} = (5000/1000) - 3 \text{ 秒} = 5 - 3 \text{ 秒}$$

## 例2-1 応答時間の計算 (続き)

したがって、応答時間は2秒です。

システムの(特に、ピーク負荷時の)応答時間を計算したら、それを、アプリケーションで許容可能な応答時間と比較します。応答時間は、スループットとともに、Application Server のパフォーマンスにとって重要な主要要因の1つです。

## 1分あたりの要求数

任意の時点での並行ユーザーの数、その要求の応答時間、およびユーザーの平均思考時間がわかっている場合は、1分あたりの要求数を計算できます。一般には、システム上に存在する並行ユーザーの数の見積もりから始めます。

たとえば、Web サイトパフォーマンスソフトウェアの実行後、管理者が、オンラインバンキング Web サイトで要求を送信する並行ユーザーの平均数を 3000 と結論付けます。この数は、オンラインバンクの会員登録を申し込んだユーザーの数、バンキングトランザクション動作、要求を送信する曜日または日時などにに基づきます。

したがって、これらの情報がわかれば、この節で説明した1分あたりの要求数の数式を使用して、このユーザーベースに対してシステムが処理できる1分あたりの要求数を計算できます。ピーク負荷時には1分あたりの要求数と応答時間が反比例関係になるため、より優れた応答時間を得るためのトレードオフとして1分あたりの要求数を減らすことが許容可能かどうか、あるいは、1分あたりの要求数を増やすためのトレードオフとして応答時間を遅くすることが許容可能かどうかを判断してください。

システム性能を微調整するための開始点として許容可能な1分あたりの要求数と応答時間のしきい値で試してください。そのあと、システムのどの領域に調整が必要かを判断してください。

前の節の式で  $r$  を求めると、次のようになります。

$$r = n / (T_{\text{response}} + T_{\text{think}})$$

## 例2-2 1秒あたりの要求数の計算

次の値の場合、

- $n = 2,800$  の並行ユーザー
- $T_{\text{response}} = 1$  (1 要求あたりの平均応答時間は 1 秒)
- $T_{\text{think}} = 3$  (平均思考時間は 3 秒)

1 秒あたりの要求の数の計算は次のようになります。

$$r = 2800 / (1+3) = 700$$

したがって、1 秒あたりの要求の数は 700、1 分あたりの要求の数は 42000 です。

## HADB への負荷の見積もり

HADB への負荷を計算するには、次の要因を考慮します。

- 44 ページの「HTTP セッション持続性の頻度」
- 44 ページの「HTTP セッションサイズと範囲」
- 46 ページの「ステートフルセッション Bean のチェックポイント設定」

セッション持続性を設定する手順については、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 7 章「高可用性 (HA) セッション持続性とフェイルオーバーの設定」を参照してください。

### HTTP セッション持続性の頻度

HADB で受信される 1 分あたりの要求の数は、持続性の頻度に依存します。持続性の頻度によって、Enterprise Server が HTTP セッションデータを HADB に保存する頻度が決定されます。

持続性の頻度オプションを次に示します。

- **web-method** (デフォルト): サーバーは、すべての HTTP 応答でセッションデータを格納します。このオプションによって、格納されたセッション情報が最新になることは保証されますが、HADB に対するトラフィックが増えます。
- **time-based**: セッションは、指定された時間間隔で格納されます。このオプションによって、HADB に対するトラフィックは削減されますが、セッション情報が最新になることは保証されません。

次の表は、持続性の頻度オプションの長所と短所を要約しています。

表 2-1 持続性の頻度オプションの比較

持続性の頻度オプション	長所	短所
web-method	最新のセッション情報を使用できることが保証されます。	応答時間が長くなり、スループットが低下する可能性があります。
time-based	応答時間が短縮されるとともに、スループットが向上する可能性もあります。	アプリケーションサーバーインスタンスの障害が発生したあと、最新のセッション情報を使用できる保証は低くなります。

### HTTP セッションサイズと範囲

1 要求あたりのセッションサイズは、セッション内に格納されているセッション情報の量に依存します。

ヒント-全体的なパフォーマンスを向上させるには、セッション内の情報の量をできるだけ削減します。

「持続性の範囲」の設定を使用して、1要求あたりのセッションサイズを微調整することができます。HTTPセッション持続性の範囲を、次のオプションから選択します。

- **session:** サーバーは、セッション情報を HADB に保存するたびに、セッションオブジェクト全体を直列化して保存します。
- **modified-session:** サーバーは、セッションが変更された場合、そのセッションのみを保存します。サーバーは変更を、Bean の `setAttribute()` メソッドへの呼び出しを傍受することによって検出します。このオプションでは内部オブジェクトへの直接の変更は検出されないため、このような場合は、`setAttribute()` を明示的に呼び出すように SFSB をコーディングしてください。
- **modified-attribute:** サーバーは、そのセッションが最後に格納されたあとに変更(挿入、更新、または削除)された属性のみを保存します。これには `modified-session` と同じ欠点がありますが、正しく適用すれば、HADB 書き込みスループットの要件が大幅に削減される可能性があります。

このオプションを使用するには、アプリケーションが次の処理を行う必要があります。

- セッション状態を変更するたびに、`setAttribute()` または `removeAttribute()` を呼び出す。
- 属性間で相互参照しないようにする。
- 複数の属性間、または少なくとも読み取り専用属性と変更可能な属性間でセッション状態を分散します。

次の表は、持続性の範囲オプションの長所と短所を要約しています。

表 2-2 持続性の範囲オプションの比較

持続性の範囲オプション	長所	短所
<code>modified-session</code>	セッション状態を変更しない要求の応答時間が向上します。	<p>Web メソッド(一般には、<code>doGet()</code> または <code>doPost()</code>)の実行中、アプリケーションは次のセッションメソッドを呼び出す必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 属性が変更された場合は、<code>setAttribute()</code></li> <li>■ 属性が削除された場合は、<code>removeAttribute()</code></li> </ul>

表 2-2 持続性の範囲オプションの比較 (続き)

持続性の範囲オプション	長所	短所
session	アプリケーションに制約はありません。	modified-session および modified-attribute オプションに比べて、スループットや応答時間が低下する可能性があります。
modified-attribute	変更されたセッション状態の割合が低い要求のスループットや応答時間が向上します。	特定の要求に対する変更されたセッション状態の割合が60%に近づくと、スループットや応答時間は低下します。このような場合は、属性を個別のレコードに分割するためのオーバーヘッドにより、パフォーマンスはほかのオプションの場合よりも低下します。

## ステートフルセッション Bean のチェックポイント設定

SFSB セッション持続性の場合、HADB への負荷は次の要素に依存します。

- チェックポイント設定が有効になっている SFSB の数。
- チェックポイント設定のために選択されている SFSB メソッドと、その使用頻度。
- セッションオブジェクトのサイズ。
- トランザクションで使用するメソッド。

チェックポイント設定は一般に、その SFSB を含む任意のトランザクションが完了したあとに(そのトランザクションがロールバックした場合でも)発生します。

パフォーマンスを向上させるには、チェックポイント設定に指定するメソッドのセットを小さくします。チェックポイントを設定するデータのサイズと、チェックポイント設定の頻度によって、特定のクライアント対話の応答時間で発生する追加のオーバーヘッドが決定されます。

## ネットワーク構成の計画

Enterprise Server をネットワークに統合する方法を計画する場合は、帯域幅の要件を見積もり、ユーザーのパフォーマンス要件を満たすような方法でネットワークを計画します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- 47 ページの「帯域幅の要件の見積もり」
- 47 ページの「必要な帯域幅の計算」
- 48 ページの「ピーク負荷の見積もり」
- 48 ページの「サブネットの設定」
- 49 ページの「ネットワークカードの選択」
- 49 ページの「HADB のためのネットワーク設定」
- 51 ページの「障害クラスの識別」

## 帯域幅の要件の見積もり

ネットワークの望ましいサイズと帯域幅を決定するには、まずネットワークトラフィックを特定し、そのピークを識別します。全体の量がピークになる特定の時間、曜日、または月の特定の日が存在するかどうかを確認したあと、そのピークの所要時間を特定します。

ピーク負荷の時間帯に、ネットワーク内のパケットの数はもっとも高いレベルに達します。一般に、ピーク負荷の設計を行う場合は、ピーク量の100パーセントを処理するという目標でシステムを拡張させます。ただし、どのようなネットワークでも予期しない動作をすること、またどれだけ拡張したとしても、必ずしもピーク量の100パーセントを処理できるとは限らないことを念頭においてください。

たとえば、ピーク負荷時に、ユーザーの5パーセントがEnterprise Server上に配備されているアプリケーションへのアクセス中にネットワークに直接アクセスできない場合があるとします。その5パーセントのうち、最初の試行のあとにアクセスを再試行するユーザーがどれだけいるかを見積もってください。ここでも、それらのユーザーがすべて実行するとは限らず、その失敗したユーザーのうちの一定の割合が再試行します。その結果、ユーザーがアクセスを試行し続けるに伴って徐々にピーク使用が拡大するため、ピークが現れる時間は長くなります。

## 必要な帯域幅の計算

39 ページの「パフォーマンス目標の確立」で行なった計算に基づいて、サイトにApplication Serverを配備するために必要な追加の帯域幅を決定します。

アクセス方法(T-1回線、ADSL、ケーブルモデム、その他)に応じて、見積もった負荷を処理するために必要な増加した帯域幅の量を計算します。たとえば、サイトでT-1回線または高速なT-3回線を使用しているとします。回線の帯域幅がわかったら、サイトで1秒あたりに生成される要求の平均数および最大ピーク負荷に基づいて、ネットワークに必要な回線数を見積もります。Webサイトの分析および監視ツールを使用して、これらの数値を計算します。

### 例2-3 必要な帯域幅の計算

1本のT-1回線は、1,544 Mbpsを処理できます。したがって、T-1回線4本から成るネットワークは約6 Mbpsのデータを処理できます。クライアントに送り返される平均的なHTMLページが30Kバイトであると仮定すると、T-1回線4本から成るこのネットワークは1秒あたり次のトラフィックを処理できます。

$6,176,000 \text{ ビット} / 8 \text{ ビット} = 1 \text{ 秒あたり } 772,000 \text{ バイト}$

$1 \text{ 秒あたり } 772,000 \text{ バイト} / 30\text{Kバイト} = 1 \text{ 秒あたり約 } 25 \text{ の並行応答ページ}$

1秒あたり25ページのトラフィックとすると、このシステムは1時間あたり90,000ページ(25×60秒×60分)を処理できるため、負荷が1日中均一であると仮定した場合、1日あたり最大2,160,000ページになります。最大ピーク負荷がこれより高い場

## 例 2-3 必要な帯域幅の計算 (続き)

合は、それに応じて帯域幅を増やします。

## ピーク負荷の見積もり

負荷を1日中均一にすることは、おそらく現実的ではありません。ピーク負荷がいつ発生し、どれだけ持続するか、および負荷全体の何パーセントがピーク負荷になるかを特定する必要があります。

## 例 2-4 ピーク負荷の計算

ピーク負荷が2時間持続し、2,160,000 ページの負荷全体の30パーセントに相当する場合は、1日のうちの2時間の間にT-1回線上で648,000 ページを処理する必要があることを示します。

したがって、この2時間の間にピーク負荷に対応するには、T-1回線の数を決算に従って増やします。

$648,000 \text{ ページ} / 120 \text{ 分} = 1 \text{ 分あたり } 5,400 \text{ ページ}$

$1 \text{ 分あたり } 5,400 \text{ ページ} / 60 \text{ 秒} = 1 \text{ 秒あたり } 90 \text{ ページ}$

4回線で1秒あたり25ページを処理できるとすると、その約4倍のページにはその4倍の回線(この場合は16回線)が必要になります。この16回線は、30パーセントのピーク負荷という現実的な最大量の処理を考慮したものです。明らかに、これらの多数の回線を使用すれば、その他の70パーセントの負荷を1日の残り時間にわたって処理できます。

## サブネットの設定

アプリケーションサーバーインスタンスとHADBノードが個別のホストマシン上に存在する分離層トポロジを使用すると、すべてのHADBノードを個別のサブネット上に配置することによってパフォーマンスを向上させることができます。これは、HADBがユーザーデータグラムプロトコル(UDP)を使用しているためです。独立したサブネットを使用することで、このサブネットの外部にあるマシンでUDPトラフィックが減少します。ただし、すべてのHADBノードは同じサブネット上に存在する必要があります。

すべてのノードと管理エージェントが同じサブネット上に存在するかぎり、管理クライアントを別のサブネットから引き続き実行できます。すべてのホストとポートをすべてのノードエージェント内でアクセス可能にするとともに、ノードをファイアウォール、UDPのブロックなどでブロックしないでください。

HADBはUDPマルチキャストを使用するため、HADBノードを含むサブネットはすべてマルチキャスト用に設定してください。

## ネットワークカードの選択

帯域幅を増やし、ネットワークパフォーマンスを最適化するために、Application Server をホストしているサーバーと HADB ノードの間に少なくとも 100 Mbps の Ethernet カード、できれば 1 Gbps の Ethernet カードを使用してください。

## HADB のためのネットワーク設定

注 - HADB は UDP マルチキャストを使用するため、システムのルーターとホストのネットワークインタフェースカード上でマルチキャストを有効にしてください。HADB が複数のサブネットワークにまたがっている場合は、それらのサブネットワーク間のルーター上でもマルチキャストを有効にしてください。最適な結果を得るには、HADB ノードをすべて同じネットワーク上に配置します。アプリケーションサーバーインスタンスは、異なるサブネットワーク上に配置できます。

次の提案を採用すると、HADB をネットワーク内で最適な状態で動作させることができます。

- 各ネットワークインタフェースに 100 Mbps 以上の専用の Ethernet チャンネルが割り当てられるように、スイッチ型のルーターを使用します。
- 4 つ以上の HADB ノードをホストしているマルチ CPU マシン上で HADB を実行する場合は、1 Gbps の Ethernet カードを使用します。平均セッションサイズが 50K バイトより大きい場合は、マシンあたりの HADB ノード数が 4 未満の場合でも、1 Gbps の Ethernet カードを使用します。
- HADB ノード内にネットワークボトルネックの疑いがある場合は、次のようにします。
  - HADB サーバー上でネットワーク監視ソフトウェアを実行して、問題を診断します。
  - ネットワーク内の 100 Mbps の Ethernet カードをすべて 1 Gbps の Ethernet カードに置き換えることを検討します。

## 可用性のための計画

ここでは、次の内容について説明します。

- 50 ページの「可用性の規模の適正化」
- 50 ページの「可用性を向上させるためのクラスタの使用」
- 50 ページの「システムへの冗長性の追加」

## 可用性の規模の適正化

システムやアプリケーションの可用性を計画するには、異なるアプリケーションにアクセスするユーザーグループの可用性ニーズを評価します。たとえば、料金を支払う外部のユーザーやビジネスパートナーはたいいてい、サービスの品質 (QoS) に内部のユーザーより高い期待を持っています。そのため、アプリケーション機能、アプリケーション、サーバーなどが使用不可になっても、支払いを行う外部の顧客に比べて内部のユーザーの方が許容性が高い可能性があります。

次の図は、発生確率が低い出来事ほど、影響を軽減するためのコストと複雑さが増加するようすを示しています。この連続曲線の一端では、単純な負荷分散クラスタを使用して、ローカライズされたアプリケーション、ミドルウェア、およびハードウェアの障害に耐えることができます。曲線のもう一方の端では、地理的に孤立したクラスタを使用することにより、データセンター全体に影響する大災害を軽減できます。

高い投資収益率を実現するには、多くの場合、アプリケーション内の機能の可用性の要件を特定することが有効です。たとえば、保険見積もりシステムが使用不可になることは許容されない(それによって新しい企業を失う)可能性があります。既存の顧客が現在の対象範囲を表示できるアカウント管理機能が短期間使用不可になっても、既存の顧客を失うことはほとんどありません。

## 可用性を向上させるためのクラスタの使用

もっとも基本的なレベルで言えば、クラスタとは、クライアントには1つのインスタンスとして見えるアプリケーションサーバーインスタンスのグループであり、たいいていは複数の物理サーバー上にホストされています。これにより、水平方向のスケラビリティや、1台のマシン上の1つのインスタンスより高い可用性が提供されます。この基本的なレベルのクラスタ分布がHTTPロードバランサプラグインと連携して動作します。このプラグインは、HTTPおよびHTTPS要求を受け付け、それをクラスタ内のインスタンスの1つに転送します。また、ORBや、統合されているJMSブローカも、アプリケーションサーバークラスタへの負荷分散を実行します。ネットワーク障害のためにインスタンスが失敗して使用不可になるか、または応答しなくなると、要求は既存の使用可能なマシンにのみダイレクトされます。ロードバランサはまた、失敗したインスタンスが復旧したことを認識し、それに応じて負荷を再配分することもできます。

## システムへの冗長性の追加

高可用性を実現するための1つの方法は、システムにハードウェアやソフトウェアの冗長性を追加することです。あるユニットに障害が発生すると、冗長なユニットが引き継ぎます。これは、耐障害性とも呼ばれます。一般に、高可用性を最大化するには、システム内に存在する可能性のあるすべてのシングルポイント障害を特定して取り除きます。

## 障害クラスの識別

冗長性のレベルは、システムが耐える必要のある障害クラス (障害の種類) によって決定されます。障害クラスのいくつかの例を次に示します。

- システムプロセス
- マシン
- 電源装置
- ディスク
- ネットワーク障害
- ビル火災またはその他の予防可能な災害
- 予測できない天災

重複したシステムプロセスによって、単一のシステムプロセス障害や単一のマシン障害に耐えることができます。重複した、ミラー化された (ペアになった) マシンを異なる電源装置に接続することにより、単一の電源障害に耐えることができます。ミラー化されたマシンを個別のビル内に保持することにより、単一のビル火災に耐えることができます。ミラー化されたマシンを地理的に離れた場所に保持することにより、地震などの天災に耐えることができます。

## 可用性を向上させるための HADB 冗長ユニットの使用

39 ページの「パフォーマンス目標の確立」で説明したように、可用性を向上させるために、HADB ノードは常にデータ冗長ユニット (DRU) で使用されます。

## 耐障害性を向上させるための HADB スペアノードの使用

スペアノードを使用すると、耐障害性が向上します。スペアノードは必須ではありませんが、最大限の可用性を実現します。

## フェイルオーバー容量の計画

フェイルオーバー容量の計画では、サーバーまたはプロセスに障害が発生した場合にシステムがデータをシームレスに復元して処理を続行できるようにするには Application Server 配備にサーバーやプロセスをどれだけ追加する必要があるかを決定します。システムが過負荷になると、プロセスまたはサーバー障害が発生して、応答時間の低下や、場合によってはサービスの完全な停止を引き起す可能性があります。このような状況に対して準備することは、配備を成功させるために重要です。

容量 (特に、ピーク負荷時の容量) を維持するには、既存の配備に、Application Server インスタンスを実行しているスペアマシンを追加します。

たとえば、それぞれ 1 つの Application Server インスタンスを実行している 2 台のマシンから成るシステムを考えてみます。これらのマシンが合わせて、1 秒あたり 300 要求のピーク負荷を処理しています。これらのマシンの 1 つが使用不可になった場合は、マシン間の負荷分散が均一であると仮定すると、システムは 150 の要求しか処理できません。したがって、ピーク負荷時の要求の半分はサービスを受けられなくなります。

## 設計上の決定

設計上の決定には、ピーク負荷または通常状態負荷のどちらのためにシステムを設計するか、およびさまざまな役割にあるマシンの数とそれらのサイズが含まれます。

### ピーク負荷または通常状態負荷のための設計

標準的な配備では、通常状態とピークの作業負荷の間に違いが存在します。

- システムがピーク負荷を処理するように設計されている場合は、応答時間を低下させることなく、ユーザーや要求の予測される最大の負荷に耐えることができます。これは、システムが、予測されるシステム負荷の極端な場合を処理できることを示します。ピーク負荷と通常状態負荷の違いが大きい場合は、ピーク負荷のために設計すると、アイドル状態の場合が多いリソースにお金をかけることになります。
- システムが通常状態負荷を処理するように設計されている場合は、予測されるピーク負荷を処理するために必要とされるすべてのリソースを持っているわけではありません。そのため、ピーク負荷が発生すると、システムの応答時間が低下します。

システムでピーク負荷をどれだけ頻繁に処理すると予測されるかによって、ピーク負荷または通常状態負荷のどちらのために設計するかが決定されます。

ピーク負荷が頻繁に、たとえば1日に数回発生する場合は、それを処理できるように容量を拡張するだけの価値があるかもしれません。システムが時間全体の90パーセントを通常状態で動作し、ピーク負荷での動作が10パーセントしかない場合は、通常状態負荷のために設計されたシステムを配備する方が望ましい可能性があります。これは、システムの応答時間が時間全体の10パーセントだけ低下することを示します。システムがピーク負荷で動作する頻度または所要時間によって、システムにリソースを追加する必要性が正当化されるかどうかを判断してください。

### システムのサイジング

アプリケーションサーバーインスタンスへの負荷、HADBへの負荷、およびフェイルオーバーの要件に基づいて、次の値を決定できます。

- 53 ページの「Application Server インスタンスの数」
- 53 ページの「HADB ノードの数」
- 54 ページの「HADB ホストの数」
- 54 ページの「HADB のストレージ容量」

## Application Server インスタンスの数

必要なアプリケーションサーバーインスタンス(ホスト)の数を決定するには、各インスタンスが複数の中央処理装置(CPU)を使用できるとしても、[41 ページ](#)の「Application Server インスタンスへの負荷の見積もり」で説明した各アプリケーションサーバーインスタンスに対する要因に基づいて環境を評価します。

## HADB ノードの数

一般的なガイドラインとして、システム内の各 CPU に 1 つの HADB ノードを割り当てるように計画します。たとえば、2 つの CPU を備えたマシンには 2 つの HADB ノードを使用します。

---

注-マシンあたりに複数の HADB ノードを割り当てている(たとえば、大型のマシンを使用している)場合は、マシン上に十分な冗長性とスケラビリティ(たとえば、複数の無停電電源装置や独立したディスク制御装置)が必ず存在するようにしてください。

---

あるいは、次の手順を使用します。

### ▼ 必要な HADB ノードの数を決定するには

- 1 次のパラメータを決定します。
  - 並行ユーザーの最大数、 $n_{\text{users}}$
  - 平均の BLOB サイズ、 $s$ 。
  - NTPS と呼ばれる、ユーザーあたりの最大トランザクション比率。

- 2 最大プライマリデータ量の  $G$  バイトのサイズ、 $V_{\text{data}}$  を決定します。  
次の数式を使用します。

$$V_{\text{data}} = n_{\text{users}} \cdot s$$

- 3 最大 HADB データ転送速度、 $R_{\text{dt}}$  を決定します。  
この値には、アプリケーション側から HADB に転送されるデータ量が反映されません。次の数式を使用します。

$$R_{\text{dt}} = n_{\text{users}} \cdot s \cdot \text{NTPS}$$

- 4 ノードの数、 $N_{\text{NODES}}$  を決定します。  
次の数式を使用します。

$$N_{\text{NODES}} = V_{\text{data}} / 5\text{GB}$$

ノードはペアで動作するため、この値を偶数に丸めます。

## HADB ホストの数

データ転送の要件に基づいて、HADB ホストの数を決定します。この計算では、すべてのホストが同じハードウェア構成とオペレーティングシステムを備え、かつ実行するノードを格納するために必要なリソースを含んでいることを前提にしています。

### ▼ ホストの数を計算するには

- 1 最大ホストデータ転送速度、 $R_{\max}$  を決定します。

この値はネットワークやホストのハードウェアによって異なるため、経験に基づいて決定します。この値は、前の節で決定した最大 HADB データ転送速度、 $R_{dt}$  とは異なることに注意してください。

- 2 このデータを格納するために必要なホストの数を決定します。

ホストの数  $N_{\text{HOSTS}}$  に分散されるデータ量  $V$  を更新すると、各ホストは約  $4V/N_{\text{HOSTS}}$  のデータを受信ようになります。次の数式を使用して、このデータ量を格納するために必要なホストの数を決定します。

$$N_{\text{HOSTS}} = 4 \cdot R_{dt} / R_{\max}$$

各 DRU に対するホストの数を同じにするために、この値をもっとも近い偶数に丸めます。

- 3 スペアノードとして、各 DRU に 1 台のホストを追加します。

ほかの各ホストが  $N$  データノードを実行する場合は、このホストで  $N$  スペアノードを実行するようにします。これにより、単一のマシン障害で  $N$  データノードがダウンするようになります。

各ホストは少なくとも 1 つのノードを実行する必要があるため、ノードの数がホストの数より小さい場合 ( $N_{\text{NODES}} < N_{\text{HOSTS}}$ ) は、 $N_{\text{NODES}}$  を  $N_{\text{HOSTS}}$  に等しくなるように調整します。ノードの数がホストの数より大きい場合 ( $N_{\text{NODES}} > N_{\text{HOSTS}}$ ) は、同じホスト上でいくつかのノードを実行できます。

## HADB のストレージ容量

HADB では、ネットワークの容量を超えるまで、ノードの追加によってほぼリニアなスケールが得られます。各ノードでは、専用のディスク (1 台または複数台) 上にストレージデバイスが設定されている必要があります。すべてのノードで、ストレージデバイスに等しい容量が割り当てられている必要があります。ストレージデバイスは必ずローカルディスクに割り当ててください。

予測されるセッションデータサイズが  $x$  M バイトであるとします。HADB はミラーノード上のデータをレプリケートするため、 $2x$  M バイトのストレージが必要です。さらに、HADB は、データへの高速アクセスを可能にするためにインデックスを使用しています。2 つのノードにはインデックス用に追加の  $2x$  M バイトが必要で

あり、必要な合計ストレージ容量は4xとなります。したがって、HADBの予測されるストレージ容量の要件は、予測されるデータ量の4倍です。

新しいノードを追加したあとにデータの再断片化が必要になる可能性があるため、HADBからデータが失われることなく将来も拡張できるようにするには、オンラインアップグレードのための追加のストレージ容量を用意してください。この場合は、データデバイス上に同じ量(4x)の追加の領域が必要です。そのため、予測されるストレージ容量は、予測されるデータ量の8倍になります。

さらに、HADBはディスク容量を次のように使用します。

- ログバッファの一時記憶域のための領域。この領域は、ログバッファサイズの4倍です。ログバッファは、データに関連する操作を常時監視します。ログバッファサイズのデフォルト値は48Mバイトです。
- 内部の管理のための領域。この領域は、ストレージデバイスサイズの1パーセントです。

次の表は、xMバイトのセッションデータサイズのためのHADBストレージ領域の要件を要約しています。

表 2-3 xMバイトのセッションサイズのためのHADBストレージ領域の要件

条件	必要なHADBストレージ領域
オンラインが必須でない場合のHADBノードの追加または削除。	4xMバイト+(4xログバッファサイズ)+デバイスサイズの1%
オンラインが必須な場合のHADBノードの追加または削除。	8xMバイト+(4xログバッファサイズ)+デバイスサイズの1%

HADBのデバイス領域が不足すると、HADBは、データを挿入または更新するクライアント要求を受け付けません。ただし、削除操作は受け付けます。HADBのデバイス領域が不足した場合は、エラーコード4593または4592を返し、対応するエラーメッセージを履歴ファイルに書き込みます。

## Message Queue ブローカの配備の計画

Java Message Service (JMS) APIは、Java EEアプリケーションおよびコンポーネントに対して、メッセージの作成、送信、受信、および読み取りを可能にするメッセージング標準です。このAPIによって、緩やかに結合され、信頼性が高く、非同期の分散通信が可能となります。Sun Java System Message QueueはJMSを実装し、Enterprise Serverと統合されているため、MQを使用してメッセージ駆動型Beans (MDB)などのコンポーネントを作成できます。

Sun Java System Message Queue (MQ)は、Java EEコネクタアーキテクチャー仕様(JCA) 1.5で規定されているように、コネクタモジュール(リソースアダプタともいう)を使

用して Enterprise Server に統合されています。コネクタモジュールは、Enterprise Server に機能を追加するための標準化された方法です。Enterprise Server に配備された Java EE コンポーネントは、コネクタモジュールによって統合された JMS プロバイダを使用して JMS メッセージを交換します。この JMS プロバイダは、デフォルトでは Sun Java System Message Queue ですが、JCA 1.5 が実装されているかぎり、必要に応じて別の JMS プロバイダを使用できます。

Enterprise Server で JMS リソースを作成すると、バックグラウンドでコネクタリソースが作成されます。そのようにして、JMS 操作のたびにコネクタランタイムが呼び出され、バックグラウンドで MQ リソースアダプタが使用されます。

リソースアダプタ API の使用に加えて、Enterprise Server は、MQ とのより緊密な統合を実現するために MQ API を使用します。この緊密な統合によって、コネクタのフェイルオーバー、アウトバウンド接続の負荷分散、MDB へのインバウンドメッセージの負荷分散などの機能が可能になります。これらの機能を使用すると、メッセージングトラフィックの耐障害性や高可用性を実現できます。

## マルチブローカクラスタ

MQ は、「ブローカクラスタ」と呼ばれる、複数の相互接続されたブローカインスタンスの使用をサポートしています。ブローカクラスタによって、クライアント接続はクラスタ内のすべてのブローカに分散されます。クラスタ化することで、水平方向のスケラビリティが提供され、可用性が向上します。

1つのメッセージブローカは約8個のCPUまで拡大縮小し、標準的なアプリケーションのための十分なスループットを提供します。ブローカプロセスが異常終了した場合、そのプロセスは自動的に再起動されます。ただし、ブローカーに接続するクライアントの数や配信されるメッセージの数が増えると、ブローカーは最終的に、ファイル記述子の数やメモリーなどの制限を超えてしまいます。

クラスタ内に1つのブローカではなく複数のブローカを配置すると、次のことが可能になります。

- 1台のマシンでハードウェア障害が発生した場合でもメッセージングサービスを提供する。
- システム保守を実行している間の停止時間を最小限に抑える。
- 異なるユーザーリポジトリを持つワークグループを格納する。
- ファイアウォールの制限に対応する。

ただし、複数のブローカを配置しても、ブローカ障害の時点で進行中であったトランザクションが代替ブローカに引き継がれることは保証されません。MQ は、失敗した接続をクラスタ内の別のブローカを使用して再確立しますが、トランザクションメッセージングを失い、進行中のトランザクションをロールバックしま

す。完了できなかったトランザクションを除き、ユーザーアプリケーションは影響されません。接続は引き続き使用可能であるため、サービスのフェイルオーバーは保証されます。

そのため、MQはクラスタ内の高可用性持続メッセージをサポートしていません。障害のあとにブローカを再起動すると、ブローカは自動的に回復し、持続メッセージの配信を完了します。持続メッセージはデータベース内か、またはファイルシステムに格納される可能性があります。ただし、ブローカをホストしているマシンがハード障害から回復しない場合は、メッセージが失われる可能性があります。

Sun Cluster Data Service for Sun Message Queue を備えた Solaris プラットフォームは、持続メッセージの透過的なフェイルオーバーをサポートしています。この構成は、真の高可用性を実現するために Sun Cluster のグローバルファイルシステムと IP フェイルオーバーを利用しており、また Java Enterprise System にも含まれています。

## マスターブローカとクライアントの同期

マルチブローカ構成では、各送信先がクラスタ内のすべてのブローカにレプリケートされます。各ブローカは、ほかのすべてのブローカ上の送信先として登録されているメッセージコンシューマを認識しています。そのため、各ブローカは、自身に直接接続されているメッセージプロデューサから遠隔メッセージコンシューマにメッセージを経路指定したり、遠隔プロデューサから自身に直接接続されているコンシューマにメッセージを配信したりすることができます。

クラスタ構成では、各メッセージプロデューサが直接接続されているブローカが、そのプロデューサから送信されるメッセージの経路指定を実行します。そのため、持続メッセージの格納と経路指定の両方を、そのメッセージの「ホームブローカ」が実行します。

管理者がブローカ上の送信先を作成または破棄した場合は常に、この情報がクラスタ内のほかのすべてのブローカに自動的に伝播されます。同様に、メッセージコンシューマがホームブローカに登録された場合、またはコンシューマがホームブローカから切り離された(明示的か、クライアントまたはネットワークの障害のためか、ホームブローカがダウンしたためかにかかわらず)場合は常に、そのコンシューマに関連する情報がクラスタ全体にわたって伝播されます。同様の方法で、持続性サブスクリプションに関する情報もクラスタ内のすべてのブローカに伝播されます。

## Message Queue ブローカを使用するための Application Server の設定

Enterprise Server の Java Message Service は、Message Queue のコネクタモジュール(リソースアダプタ)を表します。Java Message Service は、管理コンソールまたは `asadmin` コマンド行ユーティリティから管理することができます。

MQ ブローカ (JMS ホスト) は、Enterprise Server プロセスとは別の JVM で動作します。これにより、複数の Enterprise Server インスタンスまたはクラスタが MQ ブローカと同じセットを共有できます。

Enterprise Server では、「JMS ホスト」は MQ ブローカを指します。Enterprise Server の Java Message Service 設定には、使用されるすべての JMS ホストを含む JMS ホストリスト (AddressList と呼ばれる) が含まれています。

## 管理コンソールを使用した JMS の管理

管理コンソールでは、特定の構成の「Java メッセージサービス」ノードを使用して JMS プロパティを設定できます。「再接続間隔」や「再接続試行」などのプロパティを設定できます。詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 管理ガイド](#)』の第 4 章「[Java Message Service \(JMS\) リソースの設定](#)」を参照してください。

「Java メッセージサービス」ノードの下の「JMS ホスト」ノードには、JMS ホストのリストが含まれています。リストにホストを追加することも、リストからホストを削除することもできます。ホストごとに、ホスト名、ポート番号、および管理ユーザーの名前とパスワードを設定できます。JMS ホストリストには、デフォルトで、Enterprise Server に統合されたローカルの MQ ブローカを表す、"default\_JMS\_host" という 1 つの MQ ブローカが含まれています。

JMS ホストリストを、クラスタ内のすべての MQ ブローカを含むように設定します。たとえば、3 つの MQ ブローカを含むクラスタを設定するには、それぞれに対して Java Message Service 内に 1 つの JMS ホストを追加します。Message Queue クライアントは、Java Message Service 内の設定情報を使用して MQ ブローカと通信します。

## asadmin を使用した JMS の管理

管理コンソールに加えて、asadmin コマンド行ユーティリティでも Java Message Service と JMS ホストを管理できます。次の asadmin コマンドを使用します。

- Java Message Service 属性の設定: `asadmin set`
- JMS ホストの管理:
  - `asadmin create-jms-host`
  - `asadmin delete-jms-host`
  - `asadmin list-jms-hosts`
- JMS リソースの管理:
  - `asadmin create-jms-resource`
  - `asadmin delete-jms-resource`
  - `asadmin list-jms-resources`

これらのコマンドの詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Reference Manual](#)』またはそれぞれのマニュアルページを参照してください。

## Java Message Service タイプ

Enterprise Server と MQ ブローカの間の統合には、ローカルとリモートの2つのタイプがあります。このタイプ属性は、管理コンソールの「Java メッセージサービス」ページで設定できます。

### ローカルの Java Message Service

「タイプ」属性が LOCAL の場合は、Enterprise Server が MQ ブローカを起動および停止します。Enterprise Server は起動時に、デフォルト JMS ホストとして指定されている MQ ブローカを起動します。同様に、Enterprise Server インスタンスは停止時に、MQ ブローカを停止します。LOCAL タイプはスタンドアロンの Enterprise Server インスタンスに最適です。

LOCAL タイプでは、「起動引数」属性を使用して MQ ブローカの起動パラメータを指定します。

### リモートの Java Message Service

「タイプ」属性が REMOTE の場合、Enterprise Server は、外部に設定されているブローカまたはブローカクラスタを使用します。この場合、MQ ブローカの起動と停止は Enterprise Server とは別個に行い、MQ ツールを使用してブローカまたはブローカクラスタを設定および調整する必要があります。REMOTE タイプは Enterprise Server クラスタに最適です。

REMOTE タイプでは、MQ ツールを使用して MQ ブローカ起動パラメータを指定する必要があります。「起動引数」属性は無視されます。

## デフォルト JMS ホスト

デフォルト JMS ホストは、管理コンソールの「Java メッセージサービス」ページで指定できます。Java Message Service タイプが LOCAL の場合、Enterprise Server は、Enterprise Server インスタンスが起動したときにデフォルト JMS ホストを起動します。

MQ ブローカクラスタを使用するには、デフォルト JMS ホストを削除したあと、クラスタ内のすべての MQ ブローカを JMS ホストとして追加します。この場合、デフォルト JMS ホストは JMS ホストリスト内の最初の JMS ホストになります。

また、デフォルト JMS ホストを、いずれかの JMS ホストに明示的に設定することもできます。Enterprise Server が Message Queue クラスタを使用する場合、デフォルト JMS ホストは MQ 固有のコマンドを実行します。たとえば、MQ ブローカクラスタの物理送信先が作成される場合、デフォルト JMS ホストはその物理送信先を作成するためにコマンドを実行しますが、クラスタ内のすべてのブローカがその物理送信先を使用します。

## 配備シナリオの例

メッセージングのニーズに対応するには、Java Message Service と JMS ホストリストを、配備、パフォーマンス、および可用性のニーズを満たすように変更します。以降の節では、いくつかの標準的なシナリオについて説明します。

メッセージングのニーズの考慮対象が Enterprise Server のみでない場合は、最高の可用性を得られるように、MQ ブローカと Enterprise Server を別のマシンに配備します。別のオプションとして、十分なメッセージング容量が存在するようになるまで、Enterprise Server インスタンスと MQ ブローカインスタンスを各マシンで実行する方法があります。

### デフォルト配備

Enterprise Server をインストールすると、ドメイン管理サーバー (DAS) が自動的に作成されます。デフォルトでは、DAS の Java Message Service タイプは LOCAL です。そのため、DAS を起動すると、そのデフォルト MQ ブローカも起動されます。

新しいドメインを作成すると、新しいブローカも作成されます。デフォルトでは、ドメインにスタンドアロンのサーバーインスタンスまたはクラスタを追加すると、その Java Message Service は REMOTE として設定され、デフォルト JMS ホストは DAS によって起動されるブローカになります。

[60 ページの「デフォルト配備」](#) は、3つのインスタンスを含む Enterprise Server クラスタが含まれたデフォルト配備の例を示しています。

### Application Server クラスタでの MQ ブローカクラスタの使用

MQ ブローカクラスタを使用するように Enterprise Server クラスタを設定するには、Enterprise Server の Java Message Service で、すべての MQ ブローカを JMS ホストとして追加します。それにより、作成された JMS 接続ファクトリや、配備された MDB はすべて、指定された JMS 設定を使用するようになります。

次の図は、ブローカクラスタ内に3つの MQ ブローカが含まれ、クラスタ内に3つの Enterprise Server インスタンスが含まれる配備の例を示しています。

### アプリケーション固有の MQ ブローカクラスタの指定

場合によっては、アプリケーションが、Enterprise Server クラスタで使用されているものとは別の MQ ブローカクラスタを使用しなければならないことがあります。

[60 ページの「アプリケーション固有の MQ ブローカクラスタの指定」](#) は、このようなシナリオの例を示しています。これを行うには、JMS 接続ファクトリの AddressList プロパティ、または MDB 配備記述子内の activation-config 要素を使用して MQ ブローカクラスタを指定します。

接続ファクトリの設定の詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 管理ガイド』の「JMS 接続ファクトリ」を参照してください。MDBの詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Developer's Guide』の「Using Message-Driven Beans」を参照してください。

## アプリケーションクライアント

アプリケーションクライアントまたはスタンドアロンのアプリケーションが、JMS 管理によるオブジェクトにはじめてアクセスすると、クライアント JVM はサーバーから Java Message Service 設定を取得します。JMS サービスへのそれ以上の変更は、JMS サービスが再開されるまで、クライアント JVM には使用できません。



## トポロジの選択

---

パフォーマンスに関連した要因を第1章「製品概念」の説明に従って見積もったあと、Enterprise Server のトポロジを選択します。トポロジとは、マシン、Enterprise Server インスタンス、および HADB ノードの配置や、それらの間の通信フローのことです。

2つの基本的な配備トポロジがあります。どちらのトポロジにも、クラスタ内の複数の Enterprise Server インスタンス、HADB ノードのミラー化されたセット、および HADB スペアノードという共通の構成要素が含まれています。どちらのトポロジも、正しく機能するには一連の共通の設定が必要です。

この章の内容は次のとおりです。

- 両方のトポロジの 63 ページの「共通の要件」。
- 次の2つのトポロジ:
  - 65 ページの「共存トポロジ」 - Enterprise Server インスタンスと HADB ノードが同じマシン上に存在する。
  - 69 ページの「分離層トポロジ」 - Enterprise Server インスタンスと HADB ノードが別のマシン上に存在する。
- 73 ページの「使用するトポロジの決定」

### 共通の要件

ここでは、両方のトポロジに共通の要件について説明します。

- 64 ページの「基本要件」
- 64 ページの「HADB ノードとマシン」
- 65 ページの「ロードバランサの設定」

## 基本要件

どちらのトポロジも、次の基本要件を満たす必要があります。

- HADB ノードをホストするマシンはペアになっている必要がある。つまり、これらのマシンの台数は偶数である必要があります。
- 各データ冗長ユニット (DRU) 内のマシンの台数は同じである必要がある。ミラー化された (ペアになった) ノードが、主ノードとは別の DRU に含まれるように HADB データベースを作成します。
- HADB ノードをホストする各マシンにローカルのディスク記憶装置があり、その装置を使用して HADB 内のすべての持続情報を格納する必要があります。
- HADB ノードをホストするマシンは、同じオペレーティングシステムを実行している必要がある。構成とパフォーマンスの点から見て、同一またはほぼ同一のマシンを使用すると最適です。
- HTTP セッション情報および SFSB セッション情報を HADB まで持続させるには、Enterprise Server インスタンスはクラスタ内にあり、関連するすべての要件を満たしている必要がある。クラスタの設定の詳細は、『[Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 \(HA\) 管理ガイド](#)』の第 2 章「Enterprise Server でのクラスタの設定」を参照してください。
- Enterprise Server インスタンスをホストしているマシンは、構成とパフォーマンスの点から見て、できるだけ同一である必要がある。これは、ロードバランサプラグインが負荷分散にラウンドロビン方式を使用しており、異なるクラスのマシンがインスタンスをホストしている場合は、これらのマシン全体にわたって負荷が最適には分散されないからです。
- できれば、DRU ごとに個別の無停電電源装置 (UPS) を用意する。

## HADB ノードとマシン

各 DRU には HADB 内のデータの完全なコピーが含まれているため、ほかの DRU が使用不可になっても引き続き要求に対応できます。ただし、ある DRU 内のノードと、別の DRU にあるそのノードのミラーに同時に障害が発生した場合は、データの一部が失われます。そのため、停電やディスク障害など、単一の障害によって両方の DRU が影響を受けることがないようにシステムを設定することが重要です。

---

注 - 各 DRU を、完全に独立した冗長システム上で実行してください。

---

HADB ノードとマシンを設定する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 容量とスループットを向上させるには、ノードを各 DRU に対して 1 つずつ、ペアで追加します。

- 各マシン上で動作しているノードの数と同数のスペアノードを持たせて各 DRU を設定します。これは、構成内の各マシンが  $n$  個のデータノードを実行している場合、1 台のマシンの障害によって  $n$  個のノードがダウンするためです。
- 負荷をできるだけ均等に分散するために、すべてのマシン上で同じ数の HADB ノードを実行します。



---

注意- 同じマシン上で異なる DRU のノードを実行しないでください。同じマシン上で異なる DRU のノードを実行する必要がある場合は、そのマシンが任意のシングルポイント障害(ディスク、メモリー、CPU、電源、オペレーティングシステムのクラッシュなどに関連した障害)を必ず処理できるようにしてください。

---

## ロードバランサの設定

いずれのトポロジも、Enterprise Server インスタンスはクラスタ内にあります。これらのインスタンスは、セッション情報を HADB まで持続させます。クラスタ内のすべての Enterprise Server インスタンスの設定情報を含むようにロードバランサを設定してください。

クラスタの設定の詳細と、クラスタに Enterprise Server インスタンスを追加する方法の詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 2 章「Enterprise Server でのクラスタの設定」を参照してください。

## 共存トポロジ

共存トポロジでは、Enterprise Server インスタンスと HADB ノードが同じマシン上に存在します。このため、「共存」トポロジと呼ばれています。このトポロジに必要なマシンの数は、分離層トポロジに比べて少なくなります。共存トポロジでは、CPU がより効率的に使用されます。つまり、Enterprise Server インスタンスと HADB ノードが 1 台のマシンを共有するため、処理がそれらの間で均等に分散されます。

このトポロジには、少なくとも 2 台のマシンが必要です。スループットを向上させるには、より多くのマシンをペアで追加します。

---

注- 共存トポロジは、マシンの処理能力をフルに活用できるため、大規模な対称多重処理 (SMP) マシンに適しています。

---

## 構成例

次の図は、共存トポロジの構成例を示しています。

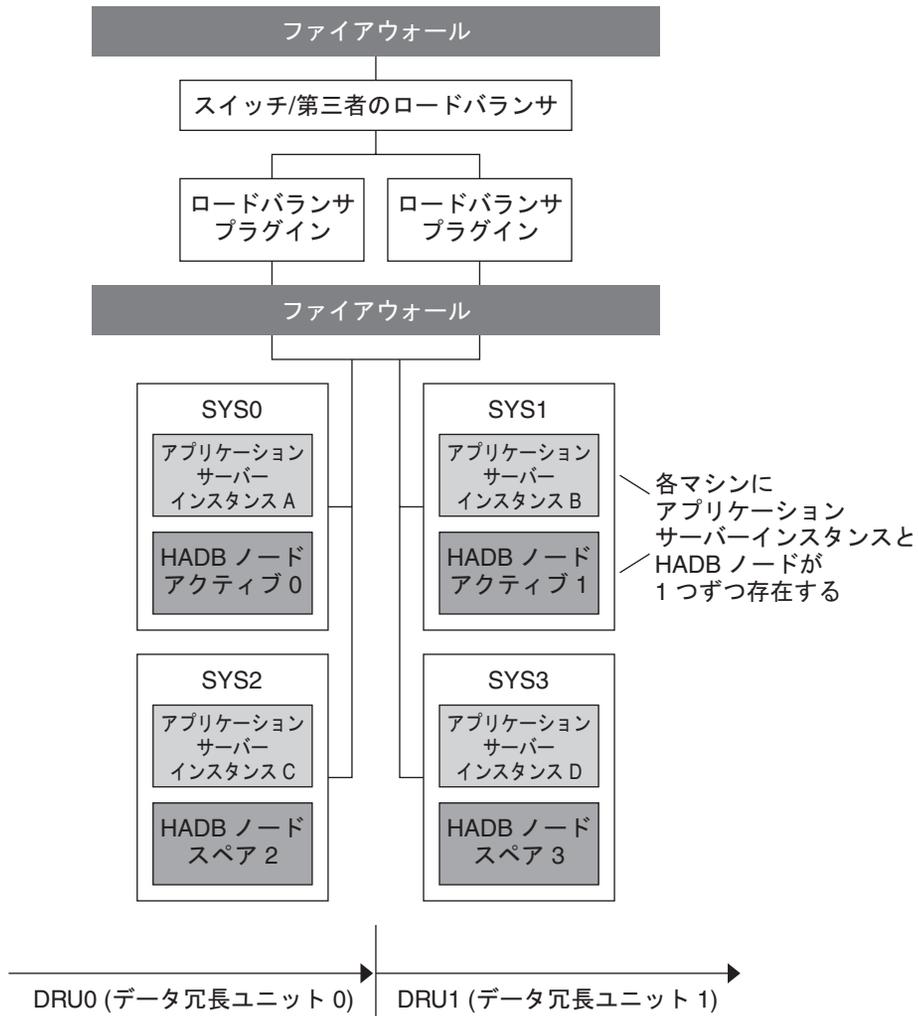


図3-1 共存トポロジの例

マシン SYS0 は Enterprise Server インスタンス A を、マシン SYS1 は Enterprise Server インスタンス B を、マシン SYS2 は Enterprise Server インスタンス C を、マシン SYS3 は Enterprise Server インスタンス D をそれぞれホストしています。

これらの4つのインスタンスは、情報を次の2つのDRUに持続させるクラスタを形成します。

- **DRU0**は2台のマシン、SYS0とSYS2で構成されます。HADBノードのアクティブ0はマシンSYS0上にあります。HADBノードのスペア2はマシンSYS2上にあります。
- **DRU1**は2台のマシン、SYS1とSYS3で構成されます。HADBノードのアクティブ1はマシンSYS1上にあります。HADBノードのスペア3はマシンSYS3上にあります。

## 共存トポロジのバリエーション

スケーラビリティとスループットを向上させるには、より多くのマシンを追加して、Enterprise Server インスタンスとHADBノードの数を増やします。たとえば、それぞれ1つのEnterprise Server インスタンスと1つのHADBノードを含む、2台のマシンを追加できます。HADBノードは必ずペアで追加し、各DRUに対して1つのノードを割り当ててください。67ページの「共存トポロジのバリエーション」は、この構成を示しています。

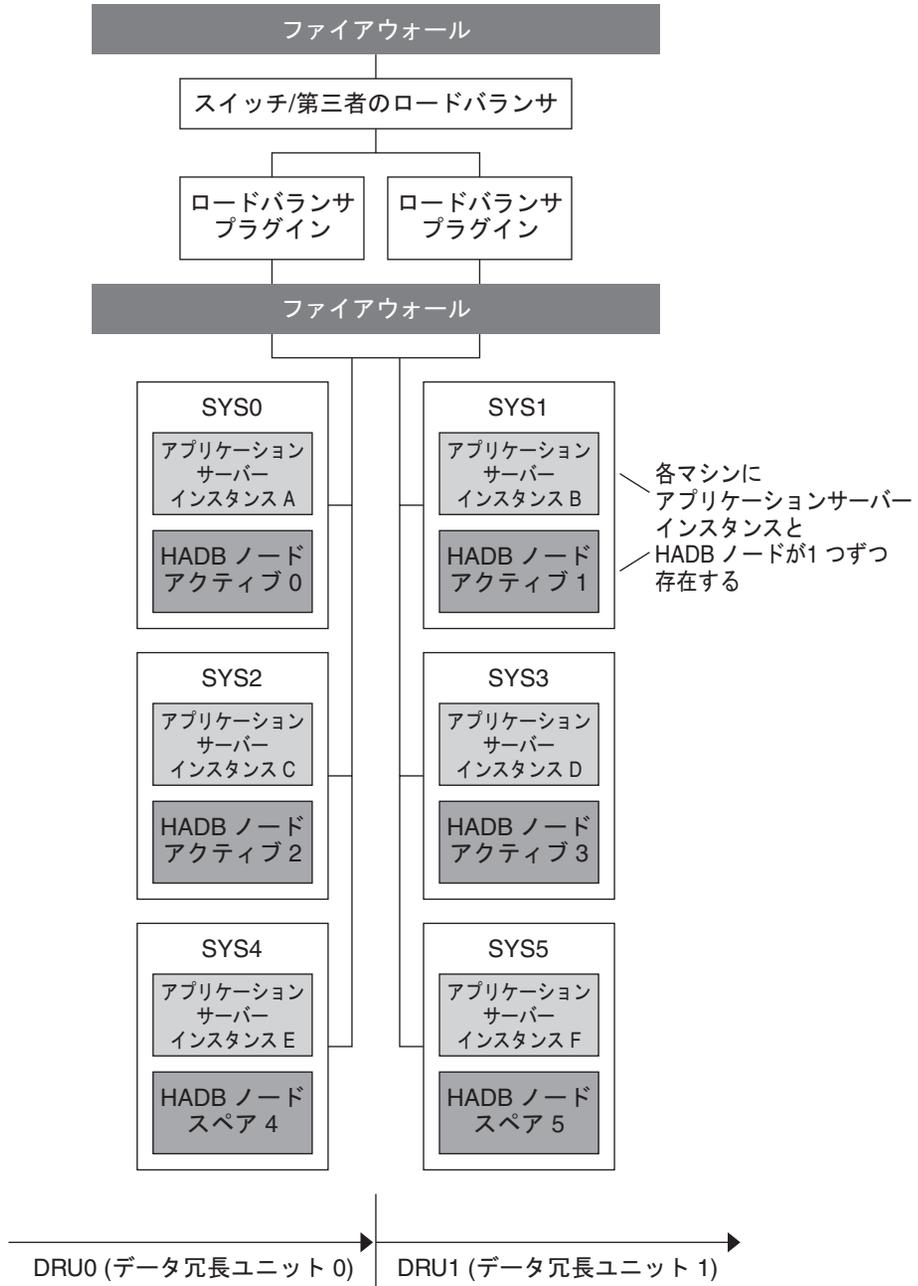


図3-2 共存トポロジのバリエーション

このバリエーションでは、66ページの「構成例」で説明された共存トポロジにマシン SYS4 と SYS5 が追加されています。

Enterprise Server インスタンスは、次のようにホストされています。

- マシン SYS0 はインスタンス A をホストしている
- マシン SYS1 はインスタンス B をホストしている
- マシン SYS2 はインスタンス C をホストしている
- マシン SYS3 はインスタンス D をホストしている
- マシン SYS4 はインスタンス E をホストしている
- マシン SYS5 はインスタンス F をホストしている

これらのインスタンスは、情報を次の2つの DRU に持続させるクラスタを形成します。

- **DRU0** は、マシン SYS0、SYS2、および SYS4 で構成されます。HADB ノードのアクティブ0はマシン SYS0 上にあります。HADB ノードのアクティブ2はマシン SYS2 上にあります。HADB ノードのスペア4はマシン SYS4 上にあります。
- **DRU1** は、マシン SYS1、SYS3、および SYS5 で構成されます。HADB ノードのアクティブ1はマシン SYS1 上にあります。HADB ノードのアクティブ3はマシン SYS3 上にあります。HADB ノードのスペア5はマシン SYS5 上にあります。

## 分離層トポロジ

このトポロジでは、Enterprise Server インスタンスと HADB ノードが別のマシン上に存在します。このため、分離層と呼ばれています。

このトポロジには、共存トポロジに比べて多くのハードウェアが必要です。このトポロジは、異なる種類のマシンがある場合に適している可能性があります。Enterprise Server インスタンスをホストするためにあるマシンのセットを割り当て、HADB ノードをホストするために別のセットを割り当てることができます。たとえば、より性能の高いマシンを Enterprise Server インスタンスに使用し、ほかのマシンを HADB に使用することもできます。

## 構成例

次の図は、分離層トポロジを示しています。

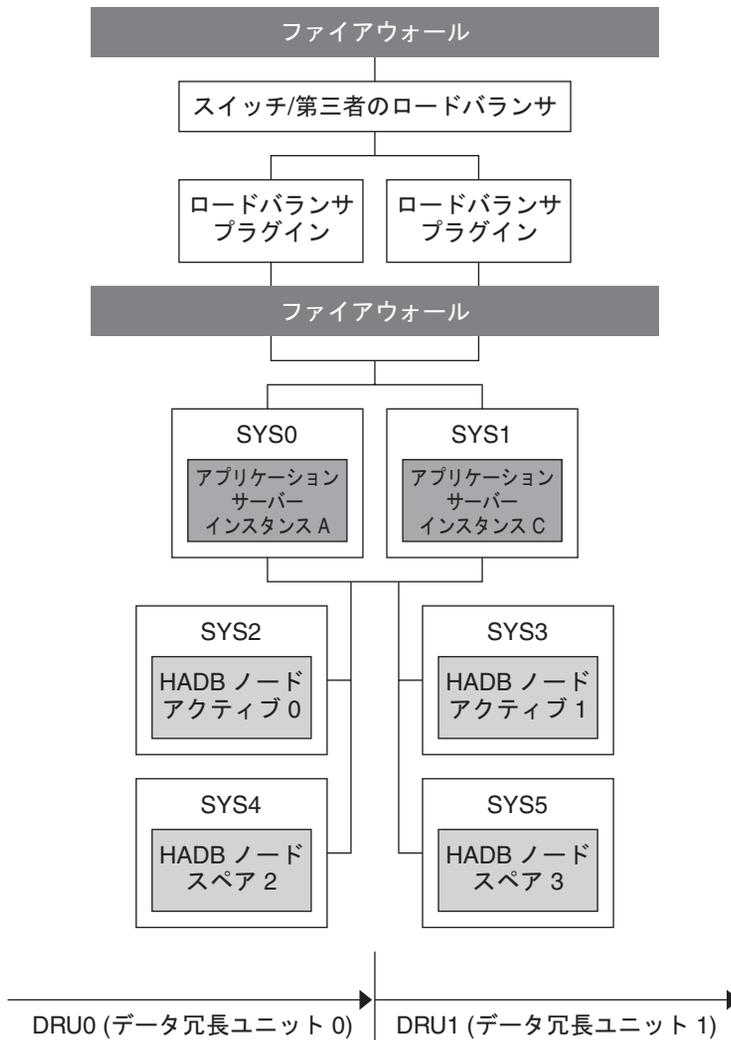


図 3-3 分離層トポロジの例

このトポロジでは、マシン SYS0 は Enterprise Server インスタンス A を、マシン SYS1 は Enterprise Server インスタンス B をそれぞれホストしています。これらの 2 つのインスタンスは、セッション情報を次の 2 つの DRU に持続させるクラスタを形成します。

- **DRU0** は 2 台のマシン、SYS2 と SYS4 で構成されます。HADB ノードのアクティブ 0 はマシン SYS2 上にあり、HADB ノードのスペア 2 はマシン SYS4 上にあります。
- **DRU1** は 2 台のマシン、SYS3 と SYS5 で構成されます。HADB ノードのアクティブ 1 はマシン SYS3 上にあり、HADB ノードのスペア 3 はマシン SYS5 上にあります。

あるマシンに障害が発生した場合でも、任意の DRU の完全なデータが引き続きほかのマシンに使用可能になるように、DRU 上のすべてのノードが異なるマシン上にあります。

## 分離層トポロジのバリエーション

分離層トポロジのバリエーションとして、構成に対して水平方向により多くのマシンを追加することにより、Enterprise Server インスタンスの数を増やします。たとえば、新しい Enterprise Server インスタンスを作成することにより、構成例に別のマシンを追加します。同様に、HADB ノードをホストするためのマシンを追加することにより、HADB ノードの数を増やします。HADB ノードは、各 DRU に対して 1 つずつ、ペアで追加する必要があることに注意してください。

71 ページの「[分離層トポロジのバリエーション](#)」は、この構成を示しています。

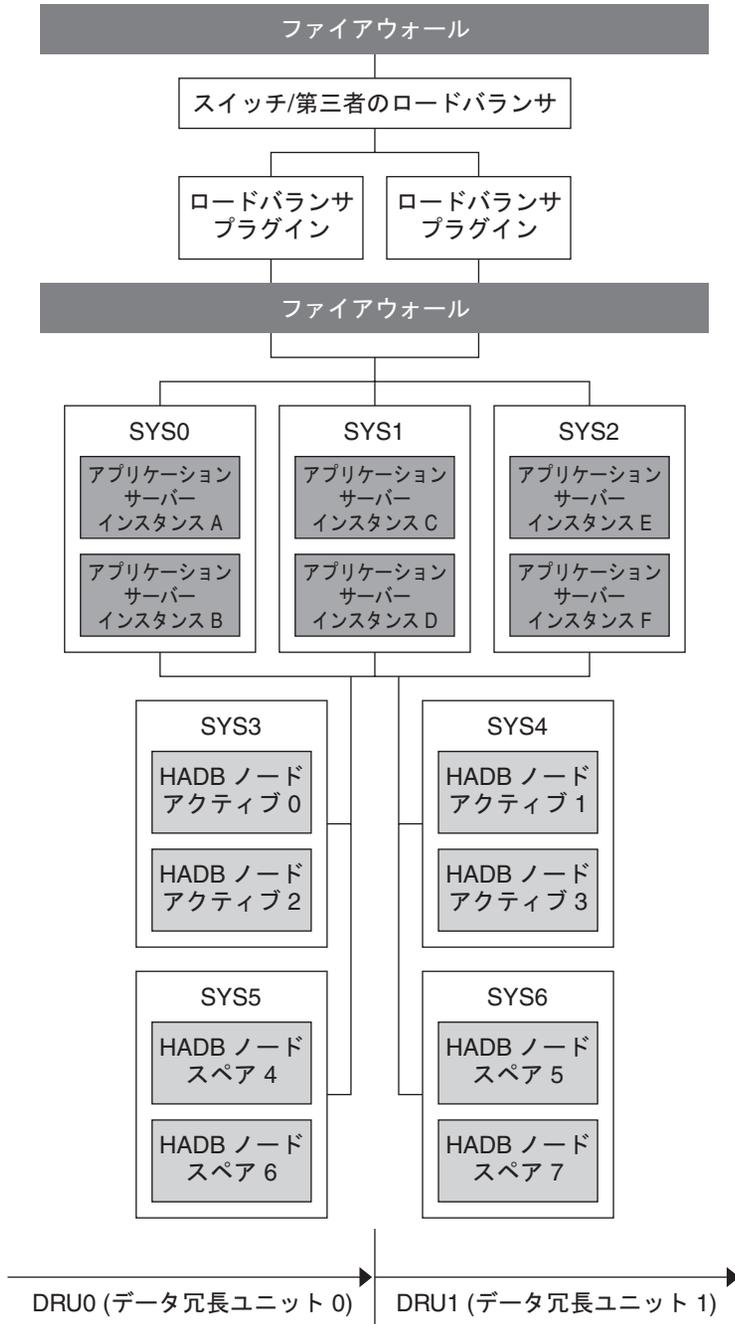


図3-4 分離層トポロジのバリエーション

この構成では、Enterprise Server インスタンスをホストしている各マシンに2つのインスタンスがあります。したがって、クラスタ内には合計6つの Enterprise Server インスタンスが存在します。

HADB ノードは、マシン SYS3、SYS4、SYS5、および SYS6 上にあります。

DRU0 は、次の2台のマシンで構成されます。

- HADB ノードのアクティブ0とHADB ノードのアクティブ2をホストしている SYS3。
- HADB ノードのスペア4とHADB ノードのスペア6を含む SYS5。

DRU1 は、次の2台のマシンで構成されます。

- HADB ノードのアクティブ1とHADB ノードのアクティブ3をホストしている SYS4。
- HADB ノードのスペア5とHADB ノードのスペア7をホストしている SYS6。

HADB ノードをホストしている各マシンが2つのノードをホストしています。したがって、4つのアクティブノードと4つのスペアノードの、合計8つのHADB ノードが存在します。

## 使用するトポロジの決定

どのトポロジ(またはバリエーション)がパフォーマンスと可用性の要件をもっともよく満たすかを判断するには、各トポロジをテストし、マシンやCPUの異なる組み合わせで試してください。

目標を満たすには、どのようなトレードオフが必要かを判断します。たとえば、保守の容易性が重要な場合は、分離層トポロジの方が適しています。この場合のトレードオフは、このトポロジには共存トポロジに比べて多くのマシンが必要なことです。

トポロジを選択する上で重要な要因は、使用可能なマシンの種類です。システムに大規模な対称多重処理(SMP)マシンが含まれている場合は、これらのマシンの処理能力をフルに活用できるため、共存トポロジが有効です。システムにさまざまな種類のマシンが含まれている場合は、Enterprise Server 層とHADB 層に異なるマシンのセットを割り当てることができるため、分離層トポロジの方が有効です。たとえば、もっとも性能の高いマシンを Enterprise Server 層に使用し、その他のマシンをHADB 層に使用することもできます。

## トポロジの比較

次の表は、共存トポロジと分離層トポロジを比較しています。左の列にはトポロジの名前が示され、中央の列は各トポロジの長所を、右の列は各トポロジの短所をそれぞれ示しています。

表 3-1 トポロジの比較

トポロジ	長所	短所
共存トポロジ	<p>必要なマシンの数が少ない。HADB ノードと Enterprise Server インスタンスが同じ層に存在するため、追加の負荷を処理する各スペアノード上に Enterprise Server インスタンスを作成できます。</p> <p>CPU 使用率の向上。1 台のマシンを共有する Enterprise Server インスタンスと HADB ノードの間で処理が均等に分散されます。</p> <p>マシンの処理能力をフルに活用できるため、大規模な対称多重処理 (SMP) マシンに有効。</p>	<p>保守がより複雑になる。たとえば、保守を実行するために HADB ノードをホストしているマシンをシャットダウンする必要がある場合は、そのマシン上のアプリケーションサーバーインスタンスも使用不可になります。</p>
分離層トポロジ	<p>保守が容易。たとえば、HADB ノードを停止することなく、Enterprise Server インスタンスをホストしているマシン上で保守を実行できます。</p> <p>異なる種類のマシンがある場合に有効。Enterprise Server 層と HADB 層に異なるマシンのセットを割り当てることができます。たとえば、より性能の高いマシンを Enterprise Server 層に使用し、その他のマシンを HADB 層に使用することができます。</p>	<p>共存トポロジに比べて多くのマシンが必要。アプリケーションサーバーインスタンスと HADB ノードが別の層に配置されるため、HADB スペアノードをホストしているマシンにはアプリケーションサーバーインスタンスを配置できません。</p> <p>CPU 使用率の低下。アプリケーションサーバー層と HADB 層の負荷が不均一になる可能性があります。この問題は、マシンの台数が少ない (4 ~ 6 台) 場合により大きくなります。</p>

# 配備のためのチェックリスト

---

この付録では、Enterprise Server を使用した評価および本番運用を始めるためのチェックリストを示します。

## 配備のためのチェックリスト

表4-1 チェックリスト

コンポーネント/機能	説明
アプリケーション	<p>配備するアプリケーションについて、次の要件を決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ 必要または許容可能な応答時間。</li><li>■ ピーク負荷特性。</li><li>■ 必要な持続性の範囲と頻度。</li><li>■ web.xml でのセッションタイムアウト設定。</li><li>■ フェイルオーバーおよび可用性の要件。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Performance Tuning Guide』を参照してください。</li></ul>
ハードウェア	<ul style="list-style-type: none"><li>■ HADB ノードのホストには、同じ種類のハードウェアを使用します。</li><li>■ 必要なハードディスク領域およびメモリー容量が備わっています。</li><li>■ サイジングの演習を使用して、配備の要件を識別します。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 リリースノート』を参照してください。</li></ul>

---

表 4-1 チェックリスト (続き)

コンポーネント/機能	説明
オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 製品がサポート対象のプラットフォームにインストールされていることを確認します。</li> <li>■ パッチレベルが最新かつ適切であることを確認します。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 リリースノート』を参照してください。</li> </ul>
ネットワークインフラストラクチャー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ シングルポイント障害を識別して対処します。</li> <li>■ NIC およびその他のネットワークコンポーネントが正しく設定されていることを確認します。</li> <li>■ ttcp ベンチマークテストを実行し、スループットが要件または期待値を満たしているかどうかを調べます。</li> <li>■ HADB ノードが正しくインストールされるように、必要に応じて rsh/ssh を設定します。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Installation Guide』を参照してください。</li> </ul>
バックエンドおよびその他の外部データソース	その分野の専門家またはベンダーの協力を得て、これらのデータソースが適切に設定されていることを確認します。
システムの変更/設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ パフォーマンステストまたはストレステストを実行する前に、<code>/etc/system</code> および Linux でこれに相当するファイルの変更が完了していることを確認します。</li> <li>■ TCP/IP 設定の変更が完了していることを確認します。</li> <li>■ システムのデフォルトでは、多くのサービスが事前に設定されています。これらすべてのサービスが実行のために必要とは限りません。システムリソースを節約するために、必要でないサービスは無効にします。</li> <li>■ Solaris では、Setoolkit を使用してシステムの動作を調べます。出現したフラグをすべて解決します。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Performance Tuning Guide』を参照してください。</li> </ul>
<b>Installation</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ NFS マウントされたボリュームにこれらのサーバーをインストールしていないことを確認します。</li> <li>■ Application Server ノードと HADB ノードの両方を同じマシンにインストールするときは、十分なディスク領域および RAM があることを確認します。</li> <li>■ 複数の HADB ノードを同じシステムにインストールするときは、十分な独立のディスクがあることを確認します。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 10 章「高可用性 (HA) データベースのインストールと設定」を参照してください。</li> </ul>

表 4-1 チェックリスト (続き)

コンポーネント/機能	説明
<b>HADB の設定</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ HADB データデバイスのサイズを設定します。</li> <li>■ DataBufferPoolSize を定義します。</li> <li>■ LogBufferSize を定義します。</li> <li>■ InternalBufferSize を定義します。</li> <li>■ NumberOfLocks を設定します。</li> <li>■ 各種の Application Server コンポーネントに対し、最適なタイムアウト値を設定します。</li> <li>■ ファイルシステム上に、HADB ノードの物理レイアウトを作成します。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 (HA) 管理ガイド』の「HADB の設定」を参照してください。</li> </ul>
<b>Application Server の設定</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ログ: アクセスログのローテーションを有効にします。</li> <li>■ 適切なログレベルを選択します。通常は WARNING が適切です。</li> <li>■ 管理コンソールを使用して Java EE コンテナを設定します。</li> <li>■ 管理コンソールを使用して HTTP リスナーを設定します。</li> <li>■ 管理コンソールを使用して ORB スレッドプールを設定します。</li> <li>■ ネイティブコードを必要とする Type2 ドライバまたは呼び出しを使用している場合、LD_LIBRARY_PATH に mtmalloc.so が指定されていることを確認します。</li> <li>■ 適切な持続性の範囲および頻度を使用しており、これらが個別の Web/EJB モジュールでオーバーライドされないことを確認します。</li> <li>■ SFSB の重要なメソッドのみがチェックポイント設定されることを確認します。 チューニングの詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Performance Tuning Guide』を参照してください。 設定の詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 管理ガイド』を参照してください。</li> </ul>
<b>ロードバランサの設定</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Web Server がインストールされていることを確認します。</li> <li>■ Web Server のロードバランサプラグインがインストールされていることを確認します。</li> <li>■ バッチチェックが無効なことを確認します。</li> <li>■ KeepAliveQuery パラメータの値を小さくします。負荷の低いシステムでは、この値が小さいほど待ち時間が短縮されます。負荷の高いシステムでは、この値が大きいくほどスループットが高くなります。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 Performance Tuning Guide』の「Keep Alive」を参照してください。</li> </ul>

表 4-1 チェックリスト (続き)

コンポーネント/機能	説明
Java 仮想マシンの設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最初は、最小および最大のヒープサイズを同じ値に設定し、各インスタンスには 1G バイト以上を設定します。</li> <li>■ 詳細は、<a href="#">Java Hotspot VM Options</a> を参照してください。</li> <li>■ Application Server の複数のインスタンスを実行するときは、プロセッサセットの作成を検討し、Application Server をそのセットにバインドします。これは、古い世代のスweepに CMS コレクタが使用される場合に効果的です。</li> </ul>
ロードバランサのタイムアウト設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Response-time-out-in-seconds - Application Server インスタンスが正常でないと宣言するまでにロードバランサが待機する時間。この値は、アプリケーションの応答時間に基づいて設定します。この値が大きすぎると、Web Server およびロードバランサプラグインは、Application Server インスタンスが正常でないと記録するまで長時間待機します。この値が小さすぎる場合に Application Server の応答時間がこのしきい値を超えると、インスタンスが正常でないと誤って記録されることとなります。</li> <li>■ Interval-in-seconds - インスタンスが正常に戻ったかどうかを確認するために、正常でないインスタンスをチェックする間隔 (秒)。この値が小さすぎると、ロードバランサプラグインから Application Server インスタンスへの不必要なトラフィックが発生します。値が大きすぎると、正常に戻ったインスタンスへの要求のルーティングが遅れます。</li> <li>■ Timeout-in-seconds - 健全性検査要求に対して応答が取得される間隔。健全性検査が確実に成功するように、クラスタ内のシステム間のトラフィックに基づいてこの値を調整します。 詳細は、『Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 4 章「HTTP 負荷分散の設定」を参照してください。</li> </ul>

表 4-1 チェックリスト (続き)

コンポーネント/機能	説明
<b>HADB のタイムアウト設定</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="496 234 1335 644">■ <code>sql_client_timeout</code> - アイドル状態のクライアントに対する SQLSUB の待ち時間。たとえば、ログオンしたクライアントは何らかの要求を送信したあと、ユーザー入力を待機します。アイドル状態が 30 分を超えたクライアントは死んでいるものとみなされ、セッションは終了されます。この値を小さく設定しすぎると、SQL セッションが完了する前に終了させてしまう可能性があります。この値を大きく設定しすぎると、アイドル状態ではないがすでに終了している SQL セッションがリソースを占有することがあります。その結果として、ほかの SQL クライアントのログオンが妨げられる可能性があります。この変数を調整するときは、<code>nsessions</code> の設定も考慮します。HADB の JDBC 接続プールの <code>steady-pool-size</code> が <code>max-pool-size</code> よりも大きい場合、<code>idle-timeout-in-seconds</code> を <code>sql_client_timeout</code> よりも小さく設定して、HADB が接続を閉じる前に Application Server 自体が接続を閉じるように設定できます。デフォルト値は 1800 秒です。</li> <li data-bbox="496 664 1335 973">■ <code>lock_timeout</code> - トランザクションがデータへのアクセスを待機する最大時間(ミリ秒)。この時間を超過すると、トランザクションは「The transaction timed out.」というエラーメッセージを生成します。このようなタイムアウトは、ほかのトランザクションが保持しているロック(デッドロック)を待機するトランザクションが原因で発生し、サーバーの負荷を増大させます。この値を 500 ミリ秒未満に設定しないでください。サーバーログに「transaction timed out」のメッセージが記録されている場合は、この値を大きくしてください。ロックのタイムアウト値を設定するには、HADB の JDBC 接続プールに <code>&lt;property name=lockTimeout value="x"&gt;</code> というプロパティを追加します。デフォルト値は 500 ミリ秒です。</li> <li data-bbox="496 994 1335 1147">■ <code>Querytimeout</code> - クエリーの実行を HADB が待機する最大時間(ミリ秒)。クエリーのタイムアウトを示す例外がサーバーログに頻繁に記録されている場合は、この値を大きくすることを検討します。この値を設定するには、HADB の JDBC 接続プールに <code>&lt;property name=QueryTimeout value="x"&gt;</code> というプロパティを追加します。デフォルト値は 30 秒です。</li> <li data-bbox="496 1168 1335 1251">■ <code>loginTimeout</code> - クライアントが HADB へのログインを待機する最大時間(秒)。この値を設定するには、HADB の JDBC 接続プールに <code>&lt;property name=loginTimeout value="x"&gt;</code> というプロパティを追加します。デフォルト値は 10 秒です。</li> <li data-bbox="496 1272 1335 1459">■ <code>MaxTransIdle</code> - クライアントに応答を送信してから次の要求を受信する間に、トランザクションがアイドル状態でいられる最大時間(ミリ秒)。この値を変更するには、HADB の JDBC 接続プールに <code>&lt;property name=maxtransIdle value="x"&gt;</code> というプロパティを追加します。デフォルト値は 40 秒です。 詳細は、『Sun Java System Application Server パフォーマンスチューニングガイド』を参照してください。</li> </ul>

表 4-1 チェックリスト (続き)

コンポーネント/機能	説明
<b>Application Server</b> のタイムアウト設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Max-wait-time-millis - プールからの接続取得を待機し、超過した場合に例外をスローする時間。デフォルトは 6s です。持続されるデータのサイズが 50K バイトを超える高負荷システムでは、この値の変更を検討します。</li> <li>■ Cache-idle-timeout-in-seconds - 非活性化されるまでに EJB がキャッシュ内でアイドル状態でいられる時間。エンティティ Bean およびステートフルセッション Bean のみに適用されます。</li> <li>■ Removal-timeout-in-seconds - EJB が非活性化状態 (バックアップストア内でアイドル状態) にとどまる時間。デフォルト値は 60 分です。この値は、SFSB フェイルオーバーの必要性に基づいて調整します。</li> </ul> <p>これらすべての値を調整するときは、HADB の JDBC 接続プールの max-wait-time-in-millis の設定に注意を払います。詳細は、『<a href="#">Sun GlassFish Enterprise Server 2.1 高可用性 (HA) 管理ガイド</a>』の「<a href="#">JDBC 接続プールの設定</a>」を参照してください。</p>
<b>VM</b> ガベージコレクション (GC) のチューニング	<p>ガベージコレクションが 4 秒以上一時停止すると、セッション状態を HADB に持続する際に一時的な問題の原因となる可能性があります。この問題を避けるには、VM ヒープを調整します。データ持続の失敗を 1 回も許容できない場合や、システムが高負荷状態でないときは、CMS コレクタまたはスループットコレクタを使用します。</p> <p>これらのコレクタを有効にするには、次のオプションを追加します。</p> <pre data-bbox="428 894 971 920">&lt;jvm-options&gt;-XX:+UseConcMarkSweepGC&lt;/jvm-options&gt;</pre> <p>このオプションはスループットを低下させる場合があります。</p>

# 索引

---

## 数字・記号

1分あたりの要求数, 43

## A

Apache Web Server, 27

asadmin コマンド, 24

## D

DAS, 24

## E

EJB コンテナ, 20

Ethernet カード, 49

## H

HADB, 30-37, 49

アーキテクチャー, 31

システム要件, 31

ストレージ容量, 54

ネットワークボトルネック, 49

ネットワーク構成, 49

ノード, 31, 53, 64

ホスト, 54

リポジトリ, 37

管理エージェント, 36

## HADB (続き)

管理クライアント, 36

管理システム, 35

管理ドメイン, 37

障害復旧, 35

負荷, 44

HTTP セッション, 28

## I

InitialContext, 29

## J

Java 2 Enterprise Edition (Java EE), 19

Java API for XML-based RPC (JAX-RPC), 20

Java API for XML Registries (JAXR), 21

Java Authorization Contract for Containers  
(JACC), 20

Java Database Connectivity (JDBC), 22

Java EE コネクタアーキテクチャー, 22

Java EE サービス, 20

Java Message Service (JMS), 20, 22, 29, 55

Java Naming and Directory Interface (JNDI), 20

JavaMail API, 22

## M

Microsoft Internet Information Server, 27

**S**

Simple Mail Transport Protocol (SMTP), 22  
Sun Java System Message Queue, 29, 55  
Sun Java System Web Server, 27

**W**

Web Server, 27  
Web Services Description Language (WSDL), 21  
Web コンテナ, 20  
Web サービス, 21  
WS-I Basic Profile (Web サービス相互運用性基本プロファイル), 21

**ア**

アクティブノード, 32  
アクティブユーザー, 41  
アプリケーション, 19

**オ**

オブジェクトリクエストブローカ (ORB), 21

**ク**

クライアント, 21  
と JMS, 61  
クラスタ  
Message Queue, 56, 60  
と可用性, 50

**コ**

コネクタ, 22  
コンテナ, 20  
コンポーネント, 23

**サ**

サーバー  
インスタンス, 23, 53  
クラスタ, 25  
コンテナ, 20  
コンポーネント, 23  
サービス, 20  
ドメイン管理, 24  
ネットワーク構成, 46  
ノードエージェント, 25  
パフォーマンス, 39  
負荷, 41, 48  
サーバーのインスタンス, 23  
サーバーのインスタンス数, 53  
サイジング、システム, 52-55  
サブネット, 48

**ス**

ステートフルセッション Bean, 28, 46  
スペアノード, 32, 33, 51  
スペアマシン、による容量の維持, 51  
スループット, 40

**セ**

セキュリティ, 20  
セッション  
HTTP, 28  
サイズ, 44  
ステートフルセッション Bean, 46  
持続性, 28, 44  
持続性の範囲, 45  
持続性の頻度, 44

**チ**

チェックポイント設定, 46  
チェックリスト, 75

## デ

データ冗長ユニット, 32-33  
  による可用性の向上, 51  
  のための電源装置, 64  
  可用性の保証, 64-65  
  内のマシンの台数, 64  
デフォルト JMS ホスト, 59  
デフォルトサーバー, 24  
デフォルト設定, 26  
デフォルト配備, 60

## ト

トポロジ  
  の構成要素, 63  
  共存, 63, 65-69  
  共通の要件, 63-65  
  選択, 63-74  
  比較, 73  
  負荷分散, 65  
  分離層, 48, 63, 69-73  
トポロジの比較, 73  
トランザクション, 20

## ド

ドメイン, 23  
ドメイン管理サーバー (DAS), 24

## ネ

ネーミング, 20  
ネットワークカード, 49  
ネットワーク構成  
  HADB, 49  
  サーバー, 46

## ノ

ノード, 64  
ノード, HADB, 31, 53

ノードエージェント, 25

## パ

パフォーマンス, 39

## ピ

ピーク負荷, 48

## フ

フェイルオーバー容量、計画, 51

## ブ

ブローカクラスタ, 56, 60

## ホ

ホスト, HADB, 54

## マ

マシン  
  スペアマシンによる容量の維持, 51  
  データ冗長ユニット内の, 64

## ミ

ミラーノード, 32  
ミラーマシン, 51

## メ

メッセージブローカ, 56  
メッセージ駆動型 Beans, 29

ユ

ユーザー、並行, 41  
ユーザーデータグラムプロトコル (UDP), 48

リ

リソース, 22  
リソースアダプタ, 22  
リモートブラウザエミュレータ, 39

ル

ルーター, 48

ロ

ローカルのディスク記憶装置, 64

応

応答時間, 42

可

可用性, 49  
    とクラスタ, 50  
    と冗長性, 50  
    データ冗長ユニットの, 64-65

管

管理コンソール, 24  
管理ドメイン, 23

共

共存トポロジ, 63, 65-69  
    バリエーション, 67-69

共存トポロジ (続き)

    対称多重処理マシンの使用, 65  
    標準的な構成, 66-67  
    共通のトポロジ要件, 63-65

構

構成要素、トポロジの, 63

高

高可用性データベース (HADB), 30-37

思

思考時間, 41

持

持続性、セッション, 28  
持続性の範囲, 45  
持続性の頻度, 44

種

種類、障害の, 51

障

障害  
    クラス, 51  
    種類, 51

冗

冗長性, 50-51, 64

## 設

設計上の決定, 52

設定, 26

デフォルト, 26

## 対

対称多重処理マシン、共存トポロジのための, 65

## 耐

耐障害性, 50

## 帯

帯域幅, 47

## 配

配備計画, 39

シナリオの例, 60

チェックリスト, 75

## 負

負荷

HADB, 44

サーバー, 41, 48

負荷分散

HTTP, 27

IIOF, 29

とトポロジ, 65

## 分

分離層トポロジ, 48, 63, 69-73

バリエーション, 71-73

参照構成, 69-71

## 並

並行ユーザー, 41

## 名

名前付き設定, 26

## 容

容量、スペアマシンを使用した維持, 51

